

令和 6 年度指定文部科学省事業

新時代に対応した高等学校改革推進事業
(普通科改革事業)

事業成果物

第 3 年次

熊本市立必由館高等学校

目次

I 研究概要

- 1 研究開発の概要
- 2 研究開発概要図
- 3 スクール・ミッション
- 4 スクール・ポリシー

II 事業の概要

- 1 事業の実績
- 2 事管理機関における事業全体の成果検証、評価
- 3 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくり

III 事業の詳細

- 1 運営指導委員会・コンソーシア会議
- 2 総合的な探究の時間の充実に向けた取組
- 3 学校設定教科「必由学」及び「探究的な学習」に係る取組
- 4 授業改善アップデート職員研修
- 5 外部講師による講義・講演（生徒対象）
- 6 視察研修
- 7 広報

IV 評価分析

- 1 目標
- 2 Ai Grow（評価分析ツール）の実施概要

V 事業一覧

VI 新学科カリキュラムマネジメントロジック案

VII 成果概要図

I 研究概要

1 研究開発の概要

令和5年度指定文部科学省事業新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革事業）の委託を受け、令和6年度新学科の開設に向け、熊本市立必由館高等学校普通科改革に取り組む。

（1）学校名・設置（予定）年度・設置する学科の種類

学校名	熊本市立必由館高等学校
所在地	熊本県熊本市中央区坪井
学科の種類	地域社会学科
設置年度	令和6年度

（2）現在の設置学科・コース 募集定員

学科	コース	クラス数	募集定員
普通科	普通	6クラス	40名×6クラス＝240名
	国際コース	1クラス	40名×1クラス＝40名
	芸術コース	1クラス	40名×1クラス＝40名
	服飾デザインコース	1クラス	40名×1クラス＝40名
	計	9クラス	360名

（3）新しくの設置する学科・コース 募集定員（学科コース名は仮称）

学科の名称	コース	クラス数	募集定員
文理総合探究科	文理コース	7クラス	35名×7クラス＝245名
	芸術コース	1クラス	30名×1クラス＝30名
	生活デザインコース	1クラス	30名×1クラス＝30名
	計	9クラス	305名

【熊本市立必由館高等学校】地域社会にかかる新学科を設置（令和6年度予定）

教育理念：自ら考え、主体的に行動し、多様な人々と協働しながら、自らの人生とよりよい社会を創造する力を育てる学校を目指す

革新的な教育活動の実践

《育成する資質・能力》

- I 多様な価値観を尊重し、新たな価値を創造する力
II 社会に関する理解を深め、地域の課題や魅力を見出す力
III 分野横断的に課題を分析し、論理立てて表現する力
IV 自己の興味・関心に応じて、生涯にわたって学び続ける力

《特色・魅力ある先進的な教育の取組》

①少人数によるクラス編制、

生徒が主体的・協働的に学ぶ仕組み
多様な生徒へのきめ細かな指導・支援を実現

- 1クラス30人または35人の少人数によるクラスを編制
生徒が主体的・協働的に学ぶことのできる授業づくり

②「学校設定科目 必由学」の新設

持続可能な社会の創り手としての資質・能力を育み、「Well-being」としての社会情緒的能力などを醸成

③熊本市役所等、地域社会の資源を活用した

課題解決型学習の充実

④探究活動等で収集したデータを科学的に

ICTを活用することにより、課題解決に向けデータを科学的に分析・検証し、表現する力の育成を目指す。

⑤生徒・教師が主体的に学校づくりに参画するAgency School

生徒が授業づくりや校則の策定・見直しなど、生徒が学校創生に参
教育実践及び教育的効果を積極的に国内外に還元するとともに、
自らの学びは自らが創る Agency Schoolを目指す。

様々な
教育活動を
支援

成果を積極的に発信



※令和３年度の「Kumamoto Education Week」の内容はコチラ⇒

3 スクール・ミッション

熊本市立必由館高等学校は、文理総合探究科を有する高校として、熊本市の未来を拓き、健康で心豊かな人生と幸せな社会を生み出す、次のような資質・能力を有したリーダーを育成します。

- ・多様な価値観を尊重し、新たな価値を創造する力
- ・地域社会や国際社会に関する理解を深め、課題や魅力を見出す力
- ・分野横断的に課題を分析し、論理立てて表現する力
- ・自己の興味・関心に気づき、深め、生涯にわたって学び続ける力

この目的のため、「市立ならでは」の次のような取組を行います。

- ・多様な生徒一人ひとりが主体的かつ協働的に学校づくりに参画する機会の拡充
- ・市役所、市立専門学校、大学、企業等と連携・協働した課題探究型学習の推進
- ・文理の枠を超えた教科等横断的学習・探究的学習の推進
- ・持続可能な社会の創り手としての資質・能力を育むキャリア教育の推進

4 スクール・ポリシー

○グラデュエーションポリシー（育成を目指す資質・能力に関する方針）

- ①校訓である「至誠・進取・和敬」のもと、多様な価値観を認め合い、互いの価値を尊重し、新たな社会の創造、発展を担う人材を育成する。
- ②確かな学力と柔軟な思考力を備え、well-being な社会を創造、発展させるために必要なリーダーシップを有し、主体的に協働できる力をもつ人材を育成する。
- ③自己の興味関心に気づき、幅広い知識とものの見方・考え方を身に付け、自分の適性や能力を生かした進路選択へ繋げるとともに、地域や社会に貢献できる人材を育成する。文理コース
- ④芸術に関する主体的な学びを通して専門的な知識・技能を身に付け、豊かな感性や柔軟な発想力、創造力を伸ばすとともに、地域や社会の共創に貢献できる人材を育成する。芸術コース
- ⑤生活に関する総合的な知識、感性、実践力を身に付け、現代社会の様々な課題解決に向け、well-being の視点から、新しいライフスタイルのあり方をデザインすることにより、地域や社会の共創に貢献できる人材を育成する。生活デザインコース

○カリキュラムポリシー（教育課程の編成及び実施に関する方針）

- ①多様な価値を尊重し合い、リーダーシップを有する人材を育成するために、生徒が主体的かつ協働的に参画できる授業や学校行事、部活動、生徒会活動などの新しい時代に求められる特色・魅力ある教育に取り組む。
- ②地域、行政、企業、大学などと連携・協働し、グローバルな視点で教科等横断的な学びを通して課題を分析し、論理立てて表現する課題探究型学習に取り組む。
- ③自己の興味関心に応じた幅広い進路選択に対応したカリキュラムのもと社会共創に関わるグローバルな学習に取り組む。文理コース

④芸術文化を取り巻く社会に目を向け、探究的な学びの中で専門的な知識・技能を習得し、豊かな感性を伸ばしながら社会共創に関わるグローバルな学習に取り組む。芸術コース

⑤「衣」をはじめ、「食」、「住」などの生活課題について課題探究型学習を取り入れながら、地域と連携した実習や研修、社会共創に関わるグローバルな学習に取り組む。生活デザインコース

○アドミッション・ポリシー（入学者の受入れに関する方針）

①中学校までの基礎学力を有し、自ら探究心をもって何事にも積極的に取り組むことができる生徒

②地域社会に関心をもち、本校の学びを生かしながら生涯にわたって主体的に社会を創造していこうとする生徒

③教科等の授業や学校行事、部活動、生徒会活動等に自らの思いや考えをもって協働的かつ意欲的に取り組もうとする生徒

Ⅱ 事業の概要

1. 事業の実績

(1) 事業の実施日程

事業項目	実施日程（令和6年4月1日～令和7年3月31日）											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
カリキュラムや教育方法等の検討・開発・実施												
カリキュラム開発会議	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
外部講師による講義	○	○	○	○			○	○		○	○	○
関係機関との連携協力体制の構築・維持												
運営指導委員会					○							○
コンソーシアム会議					○							○
先進校等視察		○							○		○	○
市役所連携・フィールドワーク	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
コーディネーター												
コーディネーター	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
新学科設置に向けた説明会等の実施												
説明会（中学生・保護者）					○	○	○					
オープンスクール					○	○						
雑誌・TV・ラジオ							○					
成果発表・成果普及												
探究学習発表会		○				○	○		○	○		○
成果発表会			○				○	○		○	○	
第4回 SB StudentAmbassador 九州大会へ参加								○				
成果検証												
委託業者評価システム AiGrow		○									○	

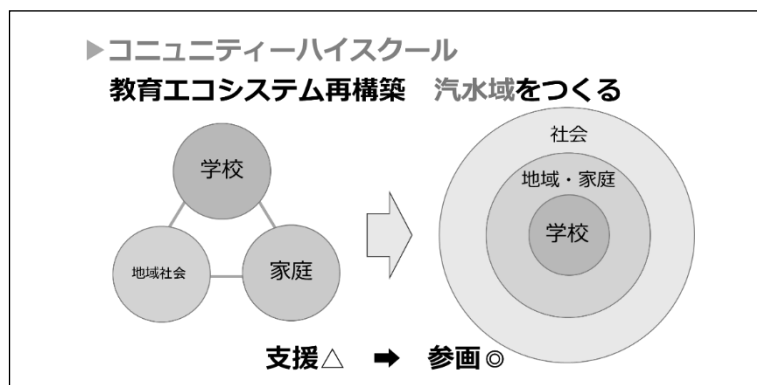
(2) 事業の実績の説明

令和6年度文部科学省事業新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革事業）の委託を受け本校においては、これまでの普通科を、教科横断的・探究的で、生徒個々の興味・関心や特性に応じた個別最適な学びの推進するため、文理総合探究科へと学科改編した。これにより、生徒が自己肯定感や社会参画に関する意識を高めるとともに、人・社会・未来とつながる「市立ならでは」の魅力ある学校を目指す。そのうえで、熊本市の未来を拓き、健康で心豊かな人生と幸せな社会を生み出す、資質・能力を有したリーダーを育成する。以下の通り熊本市立必由館高等学校普通科改革に取り組んでいる。

ア 学校教育目標の策定

学校教育目標を

「出あう つながる とともに創る ～必由館でやりたいをカタチに～」とした。



(3) 運営指導委員会

ア 運営指導委員会の体制

所属等	氏名
熊本大学 特任教授	前田 康裕
Y'sREADING 代表取締役、放射線専門診断医 医学博士 熊本大学医学部 臨床教授	中山 善晴
九州地方 EDS 活動センター	澤 克彦
必由館高等学校 PTA 会長	榊 育代
熊本市教育センター 所長	吉田 潔

イ 運営指導委員会の取組

下記の項目について専門的知見から指導・助言をいただいた。

- ・教科等横断的・探究的な学びを充実し、幅広い進路選択に対応する教育課程について
- ・グラデュエーションポリシー(ICTを活用した情報活用能力等含む)の検証について
- ・市立高校と市立専門学校、市役所各課、地域、大学間の連携強化
- ・市が所管する地域資源や人的ネットワークを活用した教育方法について
- ・学校改革に資する人事交流・人材活用等について
- ・運営・検証に生徒が主体的に関わるエージェンシー・スクール(OECD 連携)について

(4) コンソーシアム

ア コンソーシアムの体制

所属等	氏名
熊本県立大学 教授	飯村 伊智郎
九州地方 ESD 活動センター	澤 克彦
熊本市政策企画課 課長	松永 直樹
熊本商工会議所 副会頭	毛利 浩一
熊本市現代美術館、副館長兼事務協局長	岩崎 千夏
共同通信社 熊本支局	松山 泰斗

イ コンソーシアムの取組

コンソーシアムは、学科改編に伴う事業計画や実施方針などについて学校と定期的に意見交換を行う。協議において出た意見などを踏まえて検証授業等を実施し、計画の見直しを行う。あわせて教職員・生徒と共に意見交換を行い、教育課程の実施に関わることでスクールエージェンシーとしての意識変革を図る。

(5) コーディネーターの配置および活動内容

コーディネーターの業務「学校でのコーディネート業務」、「地域等におけるコーディネート業務」、「授業改善業務」とし、4名を配置した。

業務	所属等	氏名
学校でのコーディネート業務	必由館高校 副校長	佐藤 宏一
地域等におけるコーディネート業務	政策企画課 課長	松永 直樹
	地域教育推進課 課長補佐	小原 恵二
授業改善業務	熊本大学 特任教授	前田 康裕

▶学校でのコーディネート業務

- ・本校が策定するカリキュラムづくりの支援、事業実施体制の構築、年間指導計画の策定支援、評価方法の設計等を行う。
- ・学校改革プロジェクトチームを協力して、運営全体のマネジメントを行い、事業計画策定のサポートと評価、カリキュラム作成を行った。

▶地域等におけるコーディネート業務

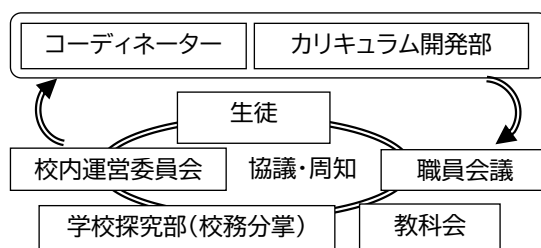
- ・行政や企業など外部機関との調整協議、地域資源や課題の把握、分析、人材バンクの構築等を行う。

▶授業改善業務

- ・探究的な学習と育成したい資質・能力を融合させ、導入・知識・推測・理解・知識理解の統合・考えのまとめ・成果へとつなげるためのカリキュラムについて、学校との協議・調整を行った。

(6) 実施体制や管理方法について

コーディネーターとカリキュラム開発部において関係機関の協力の下、計画立案し、その後、校内運営委員会、職員会議、学校探究部等で校内での協議及び周知を行い、計画を実施する。



(7) 具体的な取組

ア 少人数によるクラス編制・生徒が主体的・協働的に学ぶ授業の実現

教職員数は現状を維持しながら、少人数学級を実現することで、多様な生徒へのきめ細かな指導・支援を実現する。少子高齢化時代における新たな学校の在り方として、生徒が主体的・協働的に課題解決に向けて議論や検証、考察ができるような授業づくりを実現するとともに、指導法の工夫・改善の研修を充実させ、教職員の指導力向上を図る。

普通科(これまで)		理総合探究科(これから)	
普通	40人×6クラス	文理コース	35人×7クラス
国際コース	40人×1クラス	芸術コース	30人×1クラス
芸術コース	40人×1クラス	生活デザインコース	30人×1クラス
服飾デザインコース	40人×1クラス		

イ 入学者選抜改革

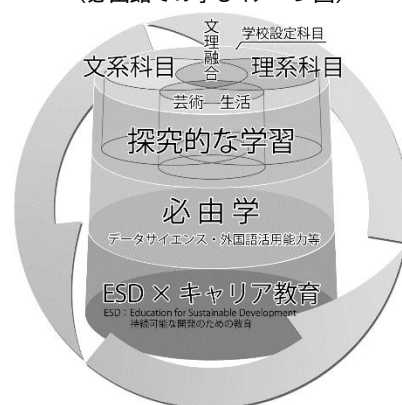
後期選抜において「スクール・ミッション」「アドミッション・ポリシー」に基づき、多様な能力・適性や意欲・関心を持つ生徒を積極的に受け入れるために、新しい制度を実施する。

後期選抜	
学校独自検査	自己アピール書
学力検査	「マークシート方式」 国社数理 (35 分) 英 (45 分)
調査書	評定に加え、実績等も評価対象とする。

ウ 学校設定教科「必由学」の新設

社会ではばたくための基礎力を身に付ける	
コアスキル	プレゼンテーション、表現力
データサイエンス	市役所連携、リーサスの活用
多文化理解	外国語活用能力、異文化交流

(必由館での学びイメージ図)



エ 校務分掌の改編

カリキュラム開発部 (旧学校探究部・旧学校改革プロジェクトチームを統合改編)	・普通科高校改革支援事業の推進 (職員研修の計画、外部講師の選定等、新学科のカリキュラムの研究・協議・検討) ・国際関係連携交渉 (OECD、JICA 等) ・外部連携交渉 (市役所、企業、各種プロジェクト、復業先生) ・校務分掌・総合的探究の時間、必由学、LHR の計画調整 ・公開授業の計画 ・学校訪問対応 ・特別活動 (学校行事、生徒会、HR 活動)
広報企画部 (旧広報情報部を改編) デジタル推進部 (新設)	・広報活動の推進 (学校 HP、 YouTube、 X の活用) ・校内 DX の推進 ・Google 系アプリ活用推進 (職員研修の企画・実施)

オ 総合的な探究の時間「感じる探究！ in 必由館」

市役所関係各課や関連機関と連携しながら「総合的な探究の時間」に取り組んでおり、生徒は活動を通して熊本市の魅力や課題などを自分事として捉え、よりよい解決について自分のキャリア形成に関連付けながら考えている。

カ 「地域創生同好会（部活動）」を新設

総合的な探究の時間の延長として、また地域教育協働活動の一貫として地域の課題を解決するためのプロジェクトを生徒主体で企画を立案し、実施する。

キ 職員研修の充実

外部講師による職員研修のほかにも、校内職員有志による自主研修を実施。

ク 視察研修の充実

EDIX(教育総合展)視察、先進校視察・生徒交流

ケ 新学科の設置についての関係者への周知

(ア) 学校 HP の活用

▶WEB 版学校紹介リーフレット作成 ▶YouTube チャンネル ▶必由館 X

(イ) 各種メディアの活用

▶校外での発表・発信の場への積極的な参加

NHK 教育「最後の講義」講師 姜尚中 聴講生として参加

NHK「どーも NHK」にて「感じる探究！ in 必由館」を密着取材

⇒NHK「地域づくりアーカイブス」への登録

▶T1パーク掲載（地元学校等紹介誌）（8月号、10月号、2月号）

（ウ）各種イベントの開催

- ▶学校説明会の開催（8月） ▶芸術コース体験入学（8月、9月）
- ▶生活デザインコース成果発表会（1月） ▶芸術コース書道系必由書道展（10月）
- ▶芸術コース音楽系成果発表会（6月、11月、2月）
- ▶中学校訪問・新学科紹介（令和6年8月～10月）

2 管理機関における事業全体の成果検証、評価

- ・AiGrowを活用した生徒の気質とコンピテンシーを可視化する調査の実施
- ・年度当初と年度末に調査を実施し、2点観測によるデータの比較から生徒個人及び学校全体としてのコンピテンシーの変容を分析し伸長につなげる。

必由館高等学校が目指す資質・能力

学校コンピテンシー	分野	コンピテンシー
① 少人数によるクラス編制の実施による効果 →多様な価値観を尊重し、新たな価値を創造する力		
(1)自分とは考えや意見の異なる相手に対しても理解を示し、それを許容する態度が持てる能力	他者	寛容
(2)何らかの課題に直面しても、「自分ならできる」と自信を持って物事を進めることのできる能力	自己	自己効力
(3)他者に対して自分の考えや目的を伝えながら、ともに協働して物事を進めることのできる能力	他者	影響力の行使
②「学校設定科目必由学」の新設 熊本市役所(各課・室)、国内外NPO及び民間事業者等、地域社会の資源を活用した課題探究型学習の充実 →社会に関する理解を深め、地域の課題や魅力を見出す力		
(1)状況を的確に把握しながら「何をすべきか」「どうやって成し遂げるか」を自ら考え出せる能力	認知	課題設定
(2)興味のない分野のことであっても、情報を積極的に収集することのできる能力	自己	興味
(3)自分が住む地域や日本のことはもちろん、世界の一員として何ができるか考えられる能力	コミュニティ	地球市民
③探究活動等で収集したデータを科学的に分析・検証し活用する力の育成 →分野横断的に課題を分析し、論理立てて表現する力		
(1)道理や筋道に即して物事を深く考えることができ、複雑なことでも分かりやすく説明できる能力	認知	論理的思考
(2)自分の考えや思いはもちろん、どんなことでも相手が理解しやすいように伝えることのできる能力	他者	表現力
④教育効果を外部に還元するシステムによるエージェンシー・スクール →自己の興味・関心に応じて、生涯にわたって学び続ける力		

(1)何らかの課題に直面しても、「自分ならできる」と自信を持って物事を進めることのできる能力	自己	自己効力
(2)自らの意思によって行動を起こして計画を進め、何事にも自ら進んで取り組むことのできる能力	自己	個人実行力
(3)自分の考えと客観的な事実とを照らし合わせながら判断し、物事を決めることのできる能力	自己	決断力
(4)どんな難題に対しても「自分の成長につながる」と信じて積極的に取り組むことのできる能力	自己	成長

3 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくり

変化の激しい社会にあって、市民のニーズや高校卒業後の進路状況等を踏まえ、改編の効果を検証し、募集定員や学科・コースの在り方について状況に応じて柔軟に見直ししていく仕組みを構築する。また、学校内部で改革を推進する仕組みづくりと教育委員会の支援体制も併せて検討する。

(1) コンソーシアムや運営指導委員会の体制は、原則として維持

事業終了後も取組内容の定期的な意見交換を行い、適宜必要な協力を得られるような体制を確立する。

(2) 教育課程の見直し

総合的な探究の時間、学校設定教科・科目についてはP D C Aサイクルに基づき適宜見直しを行う。

(3) 進学就職先への訪問、卒業生への追跡アンケート

高校での学びが卒業後の進路先での活躍にどうつながっているのか調査し、在校生へ紹介するとともに、得られたデータを検証し、校内での取組の改善につなげる。

(4) 卒業生チューター制度

県内に在住する本校の卒業生にチューターとして、探究的な学習等のアシスタントを依頼する。卒業生の「先輩力」を在校生の教育に役立てる取組とする。

4 他の事業との関係

「普通科改革支援事業」により、文理総合探究科（地域社会学科）へと学科改編を行い、少人数によるクラス編制を実現するとともに、「学校設定科目 必由学」を新設し、課題解決型、教科等横断的な学習をカリキュラムの中心に位置づけ探究活動等で収集したデータを科学的に分析・検証し活用する力の育成を養う。

文科省「DX 加速化推進事業（DX ハイスクール）」においては、デジタル技術を活用した探究学習を強化し、生成 AI やデータサイエンスのスキルを育成するとともに生徒が主体的に学び、自己の興味・関心に応じた学びを深める環境を整える。

熊本市「生徒主体の学校運営プロジェクト」においては、他校との連携・交流を図りながら生徒が熊本市の課題解決、魅力を発信するための活動に積極的参画し、リーダーシップや協働力を養う。

これらの各事業を通して、また、中高大の連携を推進することで、生徒は地域社会に貢献し、デジタル時代に対応できる人材として成長するとともに、熊本市教育振興基本計画に掲げる基本理念「豊かな人生とよりよい社会を創造するために、自ら考え主体的に行動できる人を育む」ことを目指す。

Ⅲ 事業の詳細

1 運営指導委員会・コンソーシア会議

趣旨

これからの10年を見据えた魅力ある学校（自らの学びは自ら作る Agency School）を目指し、必由館高等学校の現状、課題を踏まえ課題解決に向けた取組を協議する。

協議（指導・助言）の柱

- ・生徒の学びの姿勢の確立、職員の指導力向上
- ・探究的学習（学校設定教科「必由学」、総合的な探究の時間）の充実
- ・学科、コースの特色を活かした教育課程
- ・令和6年度学科改編にともなう、取組の検証

（1）第1回運営指導委員会、第1回コンソーシアム会議

ア 日時：令和6年月日（ ）15：00～17：00

イ 出席者：

運営指導委員

前田 康裕、宮瀬 美津子、澤 克彦、中山善治

コンソーシアム構成員

澤 克彦、毛利 浩一、岩崎 千夏、遠藤 浩昭、松山 泰斗、松永 直樹

必由館高等学校

校長 上野 正直、副校長 佐藤宏一、主幹教諭 森田 勇

ウ 次第

- | |
|---------------------------------|
| 1 開会 |
| 2 熊本市立必由館高等学校 校長あいさつ 校長 上野 正直 |
| 3 出席者紹介 |
| 4 日程説明 |
| 5 協議事項 |
| （1）必由館高等学校校改革に向けての取組状況（校長） |
| （2）必由館高等学校普通科改革に向けての指導・助言（全体協議） |
| 6 その他・諸連絡 |
| 7 閉会 |

<協議>

（質問）本校が探究な学びに力を入れたことで、生徒が実際に変わってきたことはあるか。

→ 生徒の変化は個別に見られる。積極的に外部に発信したい生徒が増えたり、生徒会長が校長に連れられて外部の方と話す機会の増加で話すのが上手になったりするなどの成長が見られている。

本校の「出あう つながる とともに創る～必由館で やりたいを カタチに～」という学校教育目標を生徒や保護者等に浸透させてきたことで、生徒が学校外でも発表したいという気持ちが出てきた。

3年生の中には偏差値を参考に大学を選ぶということから、この大学のゼミでこういう研究をしたいという進路選択をする生徒が増えてきた。探究的な学びを通して、表現力や行動力を育てることで生徒のキャリアの扉が広がってきている。

・本校の取組が、持続可能な社会の作りとしてのシステム力や日本型ウェル・ビーイング、日本の社会にマッチしてきたと自負している。大学もカリキュラムが変わり、入試も変わってきている中で、本校が今やっている自分たちの探究にこういう意味があるんだということに教師も生徒自身も気づき始めている。

（質問）部活動や進路指導も含め既存の本校の教育活動で、探究活動を重視する新しい学びについて新しい姿が見えづらい状況で教師や保護者の不安感をどう解消しているのか。また、どのように合意形成を行っているのか。

→ 職員の中には主体的、対話的で深い学びや各教科等横断的な学び、探究的な学びが重要であることは十分に認識しているが、職員全員のコンセンサスが取りづらいのは事実である。その解消のために、校内職員研修で外部指導者を招聘し授業の指導力向上等を図ることで探究的な学びや主体的、対話的で深い学びの実践を積み重ねている。このことで職員の不安解消を行っている。

保護者への情報発信については、まだ十分とは言えない。各校務分掌部が連携して学校全体として更に進め、保護者の理解を深め信頼を獲得していくことが重要である。

（質問）重複するが、保護者の立場としても社会で生活していて主体的に動いていく必要性やそういった人材が求められているという実感がある。一方で大学に進学するための学力向上が保護者として不安の一つであるが、その点についてはどうか。探究も大事であるが5教科も大事にして欲しいと保護者としては思う。

→ 確かな学力という定義は難しいが、進路保障という点で大学進学のために点数が取れるということも大切である。このこともおろそかにしないよう職員間で考えている。保護者の理解やサポートを得るための情報発信を今後継続して行っていくことで不安の解消を行っていく。

国語や英語の言語能力やデータサイエンスも重要となってくる。文系・理系に寄らずこのような力を学校全体として身に付けさせていく。

キャリア教育についても、生徒及び保護者の両方を対象にした外部講師を招聘した講演会等を充実させることで、不安の解消を目指す。

- ・ 必由館高校の改革で結論や成果を急がないで欲しいという思いがある。
- ・ 高校が終わって大学に入ることがゴールではないので、良い大学に入りましたという報告でなくてもよいのではないか。
- ・ 高校を卒業し大人になって同窓会をした際に皆幸せに暮らしているということが保護者としてとして幸せに思うので、そのようなこともいずれは成果として表れて欲しい。
- ・ 高校のより早い段階で社会課題に目を向けたり社会性を身に付けたり、そのような力も身に付けて欲しい。大学進学や学び直しはいつでもできるが、若い頃に何事にもチャレンジするという感受性を身に付けて欲しい。そのための取組をして欲しい。
- ・ 熊本市の職員としては、高校生には実際に自分自身でそのまちを歩き、地域の問題に気付いたり、具体的には通学時間のバスの状況の問題に気付いたり、一人の市民としての視点で行政に提案するようなことも積極的にやって欲しい。
- ・ 熊本市の職員としては、市役所の事業に関して、企画段階から高校生と一緒にやっていきたいという思いがある。熊本市に対して高校生がどんどん提言できる場を作りたい。

（質問）本校の教育目標を保護者にも生徒にも分かりやすく伝え、行動目標も教育目標にしようとしていることが外部から見てもよく分かるようになってきた。どのような工夫を行っているのか。

→ 保護者にはあらゆる機会に説明を行い、職員には学校経営方針をあらゆる機会に明確に示している。社会との接点を増やし、高校を汽水域のような場所にできないかと考えている。

・子供たちの狙うキャリアや考え方が変わってきたという実感が出てくるのが理想である。

（質問）学校の先生は自身の指導力をどのように高めているのか。

→ 例えば体育教員免許を持っているが、総合的な探究の時間は現役の時も大学でも学んでいない人もいる。一方で、大学卒業した後の教師たちは大学のカリキュラムの中である程度学んできている。現在の職員の多くは前者で、教員になって自分で学んできたという人が多い。学習指導要領などを読み解きながら、同僚と話し合い、試行錯誤で取り組んでいる。また、今回の高校改革に向けて様々な人を講師招へいと呼んでいたいているので、本校は恵まれていると感じている。

（質問）学校の先生たちの気持ちを大事にした学校経営の在り方について知りたい。

→ 教員自身のウェル・ビーイングが重要である。教師たちからの企画を大事にしながら、先生たちにもウキウキしてウェル・ビーイングを目指してもらいたい。課題は、教師が生徒1人1人に丁寧に対応しようとするほど、人手が足りず忙しくなってしまうことである。人的サポートが必要であるが、国や教育委員会に強く要望したいところである。

（質問）高校改革の中で国際コースが無くなったが今後国際コースの発展的解消をどのように行っていくのか。

→ 校長が2週間前に高校生と大学生とともに中国に行ってきた。このような機会の狙いは生徒が若い時からいろいろな文化に触れてもらいたいことがある。本校ではあらたにインドの学生との交流も JICA 熊本さんにお世話になりながら積極的に行っている。外国の生徒との交換留学だけでなく、熊本県内・熊本市内で生活している外国の方とどのように関わっていくか、一緒にまちづくりをしていくという視点で取り組み始めた生徒もいる。

現在、長野県の高校生と組んで、外国から来た子供を持つ母親の日本での教育のサポートに関するホームページを立ち上げようとしている生徒がいる。このような生徒を中心に学校全体として広がりを図っていく。

（質問）外国の方の入学受入れで工夫していることはあるか。また入学後のサポートにはどのようなものがあるか。

→ 本市では外国の方に対応した入学者選抜方法がある。例えば、5教科が難しい場合、3教科と面接の選抜方法である。また、本校の実績ではないが同じ市立の高等学校では、日本語指導のサポートを教育委員会が予算化してサポートするケースもある。入学後の外国の方のサポートを今後も進めていく必要性がある。

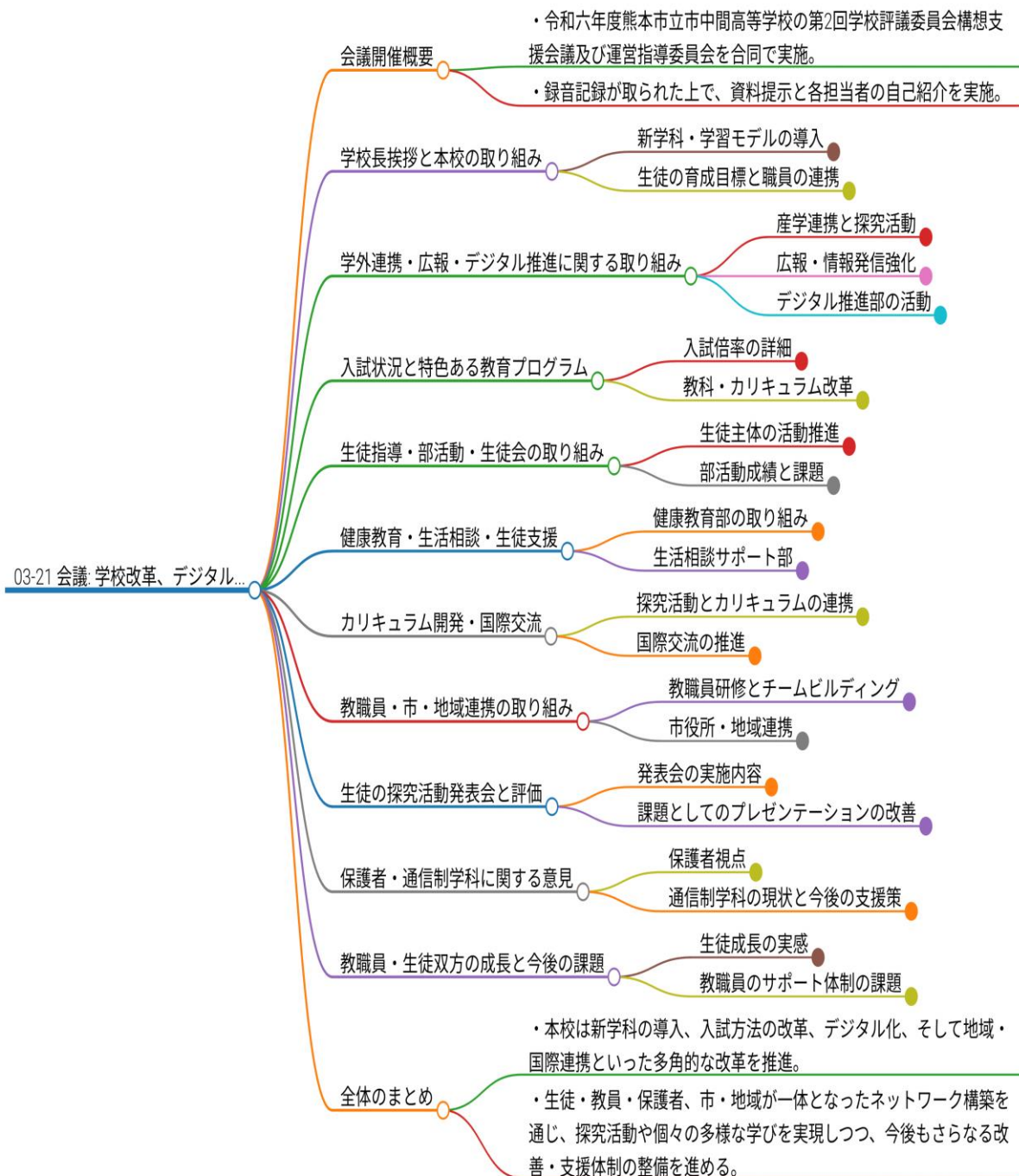
（2）第2回運営指導委員会、第2回コンソーシアム会議

ア 日時：令和7年3月21日（金）11：00～12：00

イ 出席者：前田 康裕、榑 育代、吉田 潔、毛利 浩一、岩崎 千夏
遠藤 浩昭、松永 直樹

ウ 次第

- 1 開会
- 2 熊本市立必由館高等学校 校長あいさつ 校長 上野 正直
- 3 今年度の取組について報告および意見交換
- 4 「総合的な学習の時間」活動成果発表会の参観および指導・助言
- 5 その他・諸連絡
- 6 閉会



2 総合的な探究の時間の充実に向けた取組

(1) 目標

自分を知り、地域を見つめ、社会にはばたく
～主体的・協働的に学び、自己実現を目指す～

探究的なものの見方考え方手法を身に付け、メタ認知を高め、地域の課題を仲間とともに解決していき、世界的な視野を持ちつつ、地域に根ざすことのできる人財となれる資質と能力を育成する。特に以下の3つの力を本校では重視する。

- ・課題発見力（論理的・批判的思考力を含む）
- ・協働的課題解決力
- ・表現・発信力（情報活用力を含む）

(2) 「感じる探究！in 必由館」の実施

ア 日時：令和6年5月23日（木）午後

イ 参加生徒：1、2年生

ウ 目的

「総合的な探究の時間」における市役所等・外部連携

市役所関係各課や関連機関と連携しながら「総合的な探究の時間」に取り組んでおり、生徒は活動を通して熊本市の魅力や課題などを自分事として捉え、よりよい解決について自分のキャリア形成に関連付けながら考えている。自分たちの地域である熊本市の現状や政策について知ることにより、地域の課題を自分ごととして捉え解決していこうとする探究のタネを見つける機会とする。第8次総合計画を軸としてブースを設け生徒と市役所職員の対話を重視しながら分野横断的に地域を知ることを目指す。

1、2学年合同での実施となり、1年生は協働的課題解決能力の育成、また2年生は自らの進路や自己実現を目指す。

エ 協力いただいた市役所各課、関連機関等

地域教育推進課、こども政策課、雇用対策課、熊本市教育センター、観光政策課、熊本城総合事務所、起業・新産業支援課、危機管理課、防災計画課、防災対策課、消防局総務課、国際課、高齢福祉課、JICA デスク熊本、環境政策課、廃棄物計画課、脱炭素戦略課、水保全課、スポーツ振



興課、文化政策課・現代美術館、文化財課、市街地整備課、上下水道サービス公社、改革プロジェクト推進課、人事課、データ戦略課、中央区まちづくりセンター、地方創生☆アイデアコンテスト、熊本国際コンベンション協会、ビジネスグランプリ（日本政策金融公庫）、サステナブル・ブランド国際会議



（３）文化祭における総合的な探究の時間発表とトークセッション

ア 日時：令和６年１０月２日（水）

イ 講師：宮崎大学客員教授 脇 雅昭 氏

株式会社ちかけんプロダクツ取締役 池田 親生 氏

ウ 演題：「これからの君たちに期待すること」

エ 概要：本年度の文化祭において、学年代表の生徒による総合的な探究の時間の発表が行われた。特別ゲストとして、地方創生アイデア政策コンテストの審査員を務める元総務省脇雅昭氏と、熊本で竹を使ったデザインアートを手がけ、全国に竹あかりを広めた池田親生氏をお迎えし、トークセッションを開催した。

発表では、生徒がこれまで取り組んできた探究活動の成果を紹介し、その過程で得た学びや課題について発表した。生徒は、自らのテーマについて深く考察し、実社会との接点を意識しながら探究を進めており、その姿勢が高く評価された。脇氏からは、地方創生の視点から生徒の探究活動に対して講評があり、「地域の課題を発見し、解決策を提案する力をさらに



磨いてほしい」との助言をいただいた。また、探究の成果を社会実装するための方法についても具体的なアドバイスがあった。池田氏からは、自身の経験をもとに「地域資源を活用した新たな価値創造」の重要性について語られた。特に、生徒の発表に対し、「独自の視点を持ち、それを形にすることが重要である」との示唆をいただいた。ま

た、トークセッションでは、脇氏と池田氏の両名がそれぞれの視点から探究活動の進め方やアイデアの具体化について話をされた。地域課題解決のためのアプローチや、アイデアを社会に発信するための工夫についての事例が共有され、生徒にとって貴重な学びの機会となった。

トークセッション終了後には、発表した生徒とゲストとのフリートークの時間を設けた。この場では、今後の探究活動の進め方や、課題に対する新たな視点について具体的なアドバイスが交わされた。生徒からの質問に対して、ゲストは自身の経験を交えながら丁寧に回答し、会場は大いに盛り上がった。

今回の発表とトークセッションを通じて、生徒は探究活動の新たな視点を得ることができた。ゲストの講評やアドバイスを活かし、今後の探究活動をより深めていくことが期待される。また、地域の専門家との交流を通じて、探究の成果を社会にどう活かしていくかを考える機会となり、今後の探究活動の発展につながる有意義な時間となった。



（４）総合的な学習の時間の活動成果の発表会

「探究フェスタ ～学びのシェアタイム～」の実施

ア 日時：令和７年３月２１日（金）

イ 参加生徒：１、２年生

ウ 概要：１・２学年の代表者（グループ）が、５月の市役所連携事業から現在に至るまでの総合的な探究の時間の取組を発表する初の試みである。各分野から選ばれた発表者を教室に２名配置し、交互に発表を行う。視聴する生徒はあらかじめアンケートを取り、振り分ける。

本校の目玉である市役所連携と学校設定教科必由学で得たスキルを総合的な探究の時間でいかに発揮できるか楽しみである。発表する生徒側にも準備する教師側にも様々な課題が出ると思うが、それらを今後に生かしてよりよい本校の総合的な探究の時間のカタチを構築していけるようにしたい。

（５）次年度に向けての検討課題

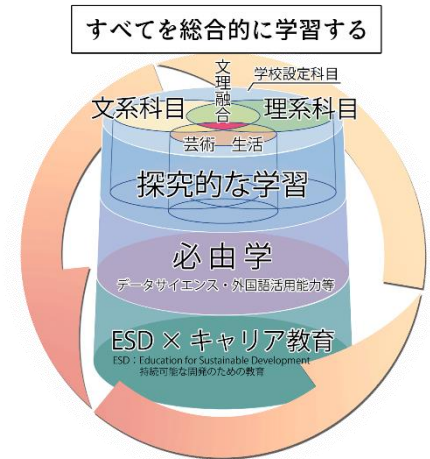
生徒の探究に対する意欲に大きな差がある。意欲の低い生徒の意欲・関心を高めるためには教職員のファシリテーション力が必要である。また、現時点では職員のファシリ

テーション力にも大きな差がある。来年度は、職員のファシリテーション力向上のための職員研修を充実させたい。

3 学校設定教科「必由学」及び「探究的な学習」に係る取組

(1) 学校設定教科「必由学」の新設

社会ではばたくための基礎力を身に付ける	
コアスキル	プレゼンテーション、表現力
データサイエンス	市役所連携、リーサスの活用
多文化理解	外国語活用能力、異文化交流



年間指導計画

月	社会を知る	人を知る	表現方法を知る	分野	単元名	指導内容	身につけるスキル
4		◎		コアスキル	オリエンテーション	・必由学で何を学ぶのか ・年間スケジュール ・どんな力を身につけるのか(スキルについて) ・自己分析(フューチャーマッピングに繋げるもの)	ビジョン 戦略性 段取りのスキルの確かな予測
5		◎		コアスキル	フューチャーマッピング	・自分が思い描く成功した人生のストーリーを書くことを通して、今、自分に必要なことは何かを考える。 Future Mapping フューチャー・マッピング	
			◎		スコラ手帳の使い方		
		○	◎	コアスキル	プレゼンテーション	・ベチャクチャ方式での表現方法を知る。(外部講師×3回) ・ベチャクチャ方式で自己紹介をするor4マス自己紹介 ・文章を棒読みする発表ではなく、最小限の文字で相手に伝える練習をする。	表現力 説明力 意欲・積極性 向上心 探究心
	◎		○	データサイエンス	データとは？(導入)	文理関係なくデータが必要・複葉先生(外部講師×3回) オンラインで3名ほどでパネルディスカッション ・データを仕事でどのように使っているのか ・どのような手段でデータを集めているのか ・高校生がデータを使って発表している動画を見て、本当にデータが必要なのかの意見を聞く	課題設定力
6	○	○	◎	データサイエンス	データとは？(体験)	・データを読んで、価値観を変える体験 最初はこわい風に思ってたけど、データをみたら変わった！というデータを読む必要性	
	◎		○	コアスキル	社会を知る①(朝日キーワード)	・『朝日キーワード』の1ページを教員が決め、配り、分かりやすくまとめる。(国語の教科書P178参考に、配布した『朝日キーワード』から気になったものから問いをつくり、自らの意見をまとめる活動。)	情報収集 説明力 発信力 言語スキル
7	◎		○	コアスキル	社会を知る②(朝日キーワード)	・『朝日キーワード』の1ページを分かりやすくまとめたものを発表する。	
			◎	多文化理解	メールの使い方・インド交流	・外部と連絡可能アドレス作成 ・メールの送受信(担当者?担任の先生?)	発信力 表現力 地球市民
		○	◎	多文化理解	インド交流②	・インドとの交流の説明 ・定型文を用いて自己紹介文の作成と送信 インド1人に対し必由1グループ(6名程度) or 2グループ(12名程度)で一通(インド側の参加人数次第) ・夏休み中に交流をする(プレゼンのための情報収集) ※フィールドワークの代わりにもなる	情報整理力 計画力
		◎		コアスキル	学びの振り返り(Aigrow含む)		

9	○			多文化理解	インド交流③	・夏休み中に交流した情報の整理 ・プレゼンのテーマ決め	表現力 説明力 意欲・積極性 向上心 探究心
	○			データサイエンス	熊本をデータで見る①	・導入 スライドづくり	説明力 戦略性 情報収集
10			○	データサイエンス	熊本をデータで見る②	・体験 スライド発表 教師のアドバイスも入れる	説明力 客観視
			○	データサイエンス	熊本をデータで見る③	・読み取り スライド発表とまとめ 振り返りも入れる	解決意向 疑う力
	○	○	○	多文化理解	インド交流④	英プレゼン準備②	
11	○	○	○	多文化理解	インド交流⑤	校内プレゼン+代表者決定① ?代表者は何グループ 例: zoomを各クラス 別で繋げば、クラスで各3班ずつ5分、同時接続。 インド側も同じく30分ほどでできる。後は交流など	傾聴力 共感 言語スキル(文章) 言語スキル(口頭)
	○	○	○	多文化理解	インド交流⑥	校内プレゼン+代表者決定② 要ALT	
	◎		○	データサイエンス	統計データ活用①	・スキル習得 RESASなど グラフを読む力・読解力など	
12	◎		○	データサイエンス	統計データ活用②	・実践: RESASなど グラフを読む力・読解力など	
	◎	◎	○	多文化理解	インド交流⑦	・インドとのオンライン交流(プレゼンの発表) 要ALT ?ZOOMアカウント数 ?どのように	表現力 説明力 意欲・積極性 向上心 探究心
	◎	○	○	コアスキル	聞き書き(職業編①)	・聞き書きとは何かを知る ・自分が知りたい職業について考える。 ・フィールドワーク基礎(取材) ・冬休みの課題として、聞き取りをしてくる	傾聴力 共感 言語スキル(文章) 言語スキル(口頭)
1	◎		○	データサイエンス	統計データ活用③	・発表 ・まとめ	数理スキル 情報収集 状況把握能力
		◎		コアスキル	学びの振り返り(Aigrow含む)		
2	◎	○	○	コアスキル	聞き書き(職業編②)	冬休みに聞いた職業の話で聞いたことをまとめる。 (やり方はできれば紙媒体が望ましい、スライドを作ってもそれを印刷して発表するようにする)	傾聴力 共感 言語スキル(文章) 言語スキル(口頭)
	◎	○	○	コアスキル	聞き書き発表(職業編③)	発表1	
3	◎	○	○	コアスキル	聞き書き発表(職業編④)	発表2	
				コアスキル	必由学振り返り		

(2) NHK 最後の講義へ聴講生として参加

ア 日時: 令和6年8月28日(水)放送

イ 本校からの聴講生参加生徒 3年生2名 2年生3名

ウ 概要

講義では、講師姜尚中氏の故郷・熊本で世界の若者20人と向き合い、アイデンティティや国際社会について語った。日本の高度成長と母国の貧困の対比を通じて、政治学の視点から「極東」の日本やアジアの遅れについて考察した。講義は、九州の高校生、大学生、留学生、社会人が参加し、姜氏の74年の人生経験が反映された内容であった。

エ 生徒の感想

最初に、今回のNHK「最後の講義」に参加できたことを非常に嬉しく思います。正直なところ、内容を理解できずに話が進んでしまった部分もありましたが、自分が考えられる限りのことを出すことができました。この講義の内容で特に記憶に残っているのは、「なぜ戦争がなくなるのか」という問いです。学校の授業でもずっと考えてきた問いですが、講義中には答えを見つけることができませんでした。しかし、今振り返ると、講義の中で触れられた「アジアの一員である自覚」が戦争を抑えることにつながるのではないかと考えます。戦争の発生要因には文化の違いや自国の利益などがありま

すが、自国や自分だけのことを考えるのではなく、アジアを一つのまとまりとして捉え、その一員であると自覚すれば、戦争を減らすことができるのではないのでしょうか。今回の講義は、将来自分たちが生きていく日本、アジア、そして世界についてしっかり考える機会となりました。

今回貴重な会にお呼びしていただきありがとうございました。僕は全く国際情勢など世界のことについての知識がなく、講義の内容は難しかったのですがなんとか理解することができました。本講義のなかで特に印象に残っていることは姜さんのおっしゃった「国と国も人と人も決して敵ではない、ライバルだ」という言葉です。たしかに昔は戦争によって物事を決めてしまっていたという歴史がありますが、その歴史があるからこそ現在では国と国とが手を取り合い持続可能な社会の形成という大きな目標をかけた協力関係を築いています。その中でもそれぞれの国で経済的に成長しようと切磋琢磨しようとする関係があります。そのことから自分とは異なる人や事に対して敵対意識を持って接しても何も生むことはできないため、良い関係を築くためには相手を知ることが一番大事なことなのかなと思います。今回の講義では普段とは違う視点で歴史を見ることで新しい考え方を得る良い機会になりました。

まず、私は「最後の講義」に参加をすることが出来て自分自身とてもいい経験になったと思います。この会に参加してみて、私が感じたのはとても話が自分自身大きなところでした。まだまだ考えなども子どもだったので、実際その場で姜尚中さんが言われたことにすぐに答えることなどは出来ませんでした。それでも最後まで自分なりに話に食いついていったと思います。私が印象に残っているのは姜尚中さんの幼少期のことです。今、姜尚中さんの講義を自分自身振り返ってみるともう少し、下準備が必要だったなと思いました。これからこの失敗を繰り返さないためにも何事にも準備をしっかりとしていきたいと思います。本当にとってもいい経験になりました。

(3) 「世界津波の日」高校生サミットへの参加

ア 日時：令和6年10月23日24日

イ 概要

2024年10月23日から24日にかけて、「世界津波の日」高校生サミットが熊本で開催された。このサミットには、国内外から500人を超える高校生が参加し、防災や減災、創造的復興について学び、議論を行った。会場は熊本城ホールで、開会式、総会、閉会式、分科会が行われた。このサミットを通じて、次世代の防災・減災を担う人材の育成と国際交流を促進し、熊本が経験した地震や豪雨災害の教訓を国内外に発信することを目的としている。

本校からも多く生徒が参加し、内1名は副議長に選出された。11月4日(月)には副議長を務めた生徒が、ニューヨークにある国際連合日本政府代表部を表敬訪問し、宣言文を報告した。

ウ 生徒の感想

私は熊本にずっと住んでいる人達よりも自然災害を経験していなくて、知識も少なかったので、災害についての知識や理解を広めることが難しかったです。だけど自分が副議長をするというのもあって、半端な知識では情熱を持って参加している人達に失礼になると思い、8月にあった事前学習日、ぼうさいこくたいなどで防災に関する知識を得て沢山知ろうとする努力をしました。さらに、防災関係の単語を英語で知っておく必要があったので、調べて勉強したりALTに教えてもらったりしました。普段の会話ではあまり使わないけれど大事なことなのでごくためになりました。



また、サミットの関係省庁への表敬訪問などを通して、失礼にならないような行動の取り方などが身についたと思います。プレゼン作成のための大学病院と介護施設やニューヨークの国連も含めて、参加していなかったら絶対に行けなかったし行かなかった場所で、普段は聞けない話を沢山聞かせてもらったのでごくいい経験になりました。

サミットでは、防災に関しても、それ以外でも、今まで喋ったことがない国々の同世代の人達と交流し、日本では聞いたことがない話を沢山聞くことができました。色々な話を聞いて、色々な考え方があるということを感じ、今までとは別の視点で物事を考えることができるようになったと思います。

また、参加している人達やニューヨークにいた人達の中には別の国のなまりがある英語を使う人達もいて、普段は聞かない英語にも触れることができいい経験になりました。

また、参加している人達やニューヨークにいた人達の中には別の国のなまりがある英語を使う人達もいて、普段は聞かない英語にも触れることができいい経験になりました。

副議長としての責任感もあり、宣言文にするために意見をまとめる力や大勢の前で発表すること、プレッシャーに打ち勝つ度胸など沢山成長できたと思います。

また、サミット全体を通して、自分の英語が通じることがすごく嬉しかったし、自信にも繋がりました。

津波サミットを通して一番成長できたことはコミュニケーション能力です。まずサミットに参加する中で一番不安だったことは英語で会話をすることでした。もともと英語で喋ることは得意ではなかったけれど自分の言いたいことを一生懸命伝えようと、なんとか相手が理解してくれて簡単な英語を使って会話ができたことがとても嬉しかったしとても自信に繋がりました。そして英語が国の主要言語ではない国の人たちとも英語を通して意見を交換することができました。だからたくさんの国の言語を学びたいと強く感じました。

サミットに参加するために1年くらい準備する中で地震のメカニズムや熊本の防災についても学ぶことができました。そしてサミットに参加する中で国や地域によって地震が多い国や少ない国があるため防災意識が違ってくるということがわかりました。私達が防災知識を深め発信することで守ることができる国もあるということがわかりこの津波サミットを通して自分自身の知識も深まりとても成長に繋がったと思います。

私が津波サミットを通して学んだことは、たくさんの人とコミュニケーションを取ることで、自分の視野や価値観が広がり、災害について防災、減災、復興の面から考えることができたことです。私は知らない人と話すのが苦手でしたが、このサミットでたくさんの人と交流し、コミュニケーションの良さを感じることができました。



サミットに参加するにあたってプレゼンする内容を考えるために友達と昼休みや放課後を使い作成して地域の防災を知るために、自分たちで介護施設や大学病院を訪問し、お話を聞くことができました。聞きたいことを聞くことができ、いい経験になりました。プレゼンでは海外の人にもわかりやすく見てもらうためにプレゼンを作るのは難しかったですが本番では、無事に伝えることができてよかったです。将来私は看護師を目指しているので津波サミットで学んだ防災や減災を活かしもっと知識を深め、海外の人にも助けることができるように外国語もたくさん勉強したいです。

英語で話すことに対して自信があまりなかったのですが積極的に話して自分の考えを伝えることやアクションを分かりやすくすることを意識して頑張りました。英語圏じゃない方の英語の聞き取りが難しく悔しさもあったのですが休み時間に趣味や制服などについて話したことで緊張感も和らぎ英語で喋ることへの抵抗感がなくなり以前よりも自信がついたと思います。

また津波サミットまでの約1年という期間、アポ取りや施設訪問、プレゼン作成などをほぼ自分たちで行ったことで防災に関することではない部分もたくさん経験をすることができ自分の成長に繋がったと思います。

津波サミットを通して防災するにあたって大切なことが主に3つあることを学びました。その一つに「教育」がありました。私は小学生のときから教師になりたいという夢があるので、その夢を叶えられたとき子どもたちに対して避難訓練を行うことの重要性・大切さなどを伝えていきたいと思いました。高校生のうちにも出来ることがたくさんあったのでプレゼン発表や身の回りの防災や次の世代や家族に防災のことを伝えるなど細かいことでもできることをしていこうと思いました。

また外国では避難訓練が行う国が少なかったり防災に対する教育があまりされていないことを津波サミットで知ったので国内だけでなく外国の教育についても学んでいきたいと考えています。

(4) フェアトレードをテーマにした他校交流会

ア 日時：令和6年11月11日（月）14:00～16:30

イ 概要

フェアトレードを学び、学校のある府中市をフェアトレードタウンにすることを目標としている明星高校2年生120名がフェアトレードをテーマにした研修旅行で来熊する。フェアトレードシティ認定から14年目になる熊本市から先進事例を学んでいただくと共に、熊本県内の高校生と交流の機会を設けることで、お互いに学び合う機会にする。

ウ 参加校

必由館高校（6名、教員1名）千原台高校（23名 教員1～2名）
明星高校（120名 教員7名 添乗員2名）
熊本農業高校（8名 教員4名） 甲佐高校（5名、教員1 三輪副町長）
フェアトレードシティくまもと推進委員会（4名）

オ 発表内容

- ・必由館高校 「つくる熊本 未来の熊本 私たちのこの手で」
「熊本市長マニフェスト検証」
- ・千原台高校 「フェアトレードシティくまもとの現状とその現状を踏まえて
高校生の自分たちにできることは何か」
- ・熊本農業高校 「養豚業のゼロエミッション #産業廃棄物に輝きを！」

カ 生徒の感想

私は今まで同年代の方のプレゼンを聴く機会がなかったので凄く新鮮で楽しかったですし、自分にとって刺激のある時間になりました。

特に、熊本農業高校の石鹼は試行錯誤を繰り返し探求の大変な部分を見れましたし、プレゼンも見ると見る人の興味を引く工夫がスライドの中に多数取り入れられて自分もこうなりたいたと思いました。

同じテーマでも学校ごとで取り組みが違ったり、視点が違ったりして見ていて面白く、こんなやり方もあるんだと学ぶことが多くありました。
スライドだけでなく他校の人と会話をしたときに自分にはない考えをたくさん聞くことができ視野が広がるきっかけになりました。

それぞれの学校のプレゼンに個性が出ていて、見ていてとても楽しかったです。
特に熊本農業高校のプレゼンは、見る人の興味を引く工夫がたくさんしてあり、話し手の喋り方まで聞きやすいようにされていた点にすごく関心したし、心から尊敬しました。私もこれからスライドを作る機会が増えてくると思うので、参考にしようと思います。

異なる学校の生徒達とプレゼンを通して直接交流できる機会はなかなかないと思うので、様々な視点やアイデアに触れることができ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。他校の生徒たちがどのように問題を捉え、解決策を考えているのかも知ることができ、自分の活動に対する新たなインスピレーションを得ることができました。また、ディスカッションを通して、自分の考えを深めることができ、他者の意見を尊重する大切さも学ぶことができました。

高橋琴音

それぞれの地域の課題や学校の課題を見つけて改善して行くための取り組みの工夫が様々で面白かったです。またプレゼン発表のあとのグループワークでは、普段関わることのない同じ高校生と意見交流をするなかで新しい視点からの考えを学ぶことができました。今回の各学校の発表の良かったところを取り入れて今後の自分の活動に活かしていきたいです。

(5) 第5回 SB Student Ambassador ブロック大会（九州大会）への参加

ア 日時：令和6年10月12日（土）

イ 場所：福岡大学七隈キャンパス（福岡市）

ウ 参加生徒：2年生 9名

エ 概要：サステナビリティに取り組む企業の実践等を踏まえ、同年代の仲間とディスカッションすることによって、サステナビリティに関する新たな気づきや、アイデアを生み出すことを目的に開催された。

オ 参加した成果・まとめ

異なる地域、高校に通う生徒とともに社会課題について考え、議論を重ねたことは本校生徒にとって大変有意義なものであった。参加した生徒たちが本校の探究活動を引っ張っていく存在になることを期待している。

カ 生徒の感想

SB 国際会議の高校生九州ブロック大会では、さまざまな視点から持続可能な社会について考えることができました。特に、他校の生徒と意見を交わすことで、自分にはなかった発想や新しい視点を得ることができました。また、地域ごとの課題や取り組みについても知ることができ、地元の現状を見つめ直すきっかけになりました。グループディスカッションでは、意見をまとめる難しさを感じることもありましたが、それぞれの考えを尊重しながら協力する大切さを学ぶことができました。また、グループディスカッションや発表の中で伝える力の重要性を再認識しました。最初は緊張していて意見を出し合うことが少なかったですが、少しずつ慣れていき積極的に発言できるようになりました。他にも、アイデアが豊富で意見を出すことが得意な人や、たくさん出てくる意見をまとめることが得意な人など、それぞれの得意なところを活かしてグループ全体としての意見を出すことができました。今回の経験を通じて、持続可能な社会の実現に向けて、自分に何ができるかを考えることが大切だと感じました。今後はこの経験を活かし、より広い視野で社会課題に取り組んでいきたいです。

10月12日に福岡大学で開催された「SB Student Ambassador 九州ブロック大会」の基調講演を聞きとても刺激を受けた。講演を行った辻田創さんは、外資系IT企業に勤めながら、環境NGOや政策提言の活動も行い、さらにはトライアスロンや音楽、絵、海外旅行など、多方面にわたる興味を持っている。このように多くの分野に関わることで、人とつながり、イノベーションを生み出せるという考え方がとても印象的だった。特に心に残ったのは、「自分を多様化すれば、多くのことが成し遂げられる」という言葉だ。辻田さんは、さまざまな経験を積むことで、社会課題の解決策を見つけやすくなると話していた。異なる分野の知識や経験を持つことで、それらをつなげて新しいアイデアを生み出せるという考え方は、とても共感できる。私はこれまで、一つの分野を極めることが大切だと思っていたが、幅広い知識を持つことも同じくらい重要だと気づかされた。

また、辻田さんが伝えた3つのメッセージも印象的だった。特に「自分の価値観や軸は一つでなくてもいいし、途中で変えてもいい」という言葉には安心感を覚えた。これから進路を決めるにあたって、「一度決めたら変えてはいけない」と思い込んでいたが、自分の成長に合わせて変えてもいいのだと分かった。

この講演を通じて、私はもっといろいろなことに挑戦し、自分の可能性を広げていきたいと感じた。そして、社会課題の解決に向けて、自分なりの視点を持ちながら行動していきたい。

SB国際会議の高校生九州ブロック大会に参加したことは、非常に貴重な経験となりました。大会では、「健康寿命を延ばすには？」というテーマで、他県の高校生とディスカッションを行い、その結果を発表しました。

まず、味の素の社員の方から、企業が行っている健康に関する取り組みについてお話を伺いました。味の素は、食を通じて健康に貢献することを目指しており、栄養バランスの取れた食事を提供するための研究や、食品の品質向上に力を入れています。また、持続可能な方法で食品を生産し、地域社会や環境にも配慮した取り組みを行っていることを学びました。

その後、他県の高校生と一緒に「健康寿命を延ばすには？」というテーマでディスカッションをしました。私たちは「お年寄りの健康寿命を伸ばすには？」ということに着目し、それには恋愛が大事なのでは？と考えました。そして「回覧板マッチング」という回覧板でのマッチングの仕組みを構想し、発表するまでにいたりしました。

最後に、ディスカッションで得た知識や意見を基に発表を行い、参加者全員で健康寿命を延ばすための実践的な方法について考えることができました。この経験を通して、健康に対する意識が高まり、今後自分の生活に活かしていきたいと感じました。

今回SB国際会議九州ブロック大会に参加し、普段の学校生活では得られない貴重な経験をすることができました。特に、班での話し合いを通じて、自分一人では思いつかな

いような意見やアイデアがたくさん出てきたことが印象的でした。自分の考えだけではなく、他の人の視点を取り入れることで、新しい発見ができることを実感しました。また、一人で考えるよりも、話し合いの中で互いに意見を出し合うことで、よりよい案が出ることに気づきました。議論を重ねるうちに、異なる意見が合わさって新たなアイデアが生まれて、いい発表をすることが出来たと思います。このような経験を通して、協力して考えることの重要性を改めて感じました。

さらに、大会が終わった後に同じ学校の人たちと感想を共有しました。それぞれが参加した講和の内容について話し合いました。自分が聞いた講和だけでなく、他の講和の内容やそこで話し合われた課題についても知ることができ、より広い視野を持つことができました。このように、みんなで学びを共有することで、さらに理解が深まり、大会の経験をより充実したものにすることができました。

今回の大会を通じて、話し合いの重要性や、多様な意見に触れることの大切さを学びました。この経験を今後の学びにも活かしていきたいと思います。

(6) OECD Education 2030「プロジェクト∞無限大 (Project∞Infinity)」への参加

ア 概要

OECD 共同研究（事務局：東京学芸大学）の一環として、～学校が変われば、未来が変わる“My School, Our Future”～をテーマに、「Well-being あふれる学校」の先駆的实践に取り組む学校として参加した。このプロジェクトは OECD Education2030 プロジェクトによる取組の一つで、日本の学生の声から始まった。生徒と教師、その他の大人が、異なる視点を持ち寄り、対等な立場で共創することにより、OECD 東北スクールを起源とするスピリット「過去を超える、常識を超える、国境を超える」を実現し、新しいより良い未来の実現を目指す。「Well-being あふれる学校」について、共通のビジョンを持つ国内外の学校や生徒をマッチングし、様々なテーマや取り組みにより「カリキュラム開発」と「新しい評価」の実証研究を行った。

イ 生徒の感想

私は参加した必由館のメンバーのリーダーを務めました。活動の中での学びは数え切れないほどありますが、その中でも語学、英語でのコミュニケーションに関しての学びがあります。1つ目は、話そうと思い切ること、挑戦する気持ちが大切だということです。発表までの約半年、二週間に一回のペースで行った韓国の高校生とのオンライン上の交流を行いました。国を超えた交流で自己紹介をして趣味や夢を話すことは初めてだったのでとても刺激的でした。ただ、その交流の中で相手との英語力の差も同時に実感しました。その差を実感したことで萎縮してしまい、話そうと思う気持ちが減ってしまいました。参加した必由館メンバーも人任せにする雰囲気生まれてしまうこともありましたが、そこで私はこの雰囲気をチャンスにしてみんなが話そうとしないからこそ積極的に発言しようと決めて、かけてきた時間が違うだけで今の英語力で伝わらなくてもいいから英語を使おうと思い切りました。相手側の生徒の皆さんもわからないなりに伝えたいことはなにか汲み取ろうとしてくれました。人の暖かさを感じることができ、思い

切りと話そうとする姿勢が大切だということを学ぶことができました。2つ目は動画の意図をより明確に汲み取ってもらうには複数の翻訳機や辞書を参考し、ネイティブの意見を踏まえて作成することが大切だということです。これは制作物を発表する際に感じた失敗からの学びです。オンラインで会場の皆さんに動画共有をして制作物を見てもらい、その後フリートークで質問に回答する時間がありました。動画を共有している間は参加者の方が全員画面を見ているので表情が見て取れました。導入のBGMでポケモンダンスが流れたときは皆さん笑顔だったのですが、段々と表情が暗くなっているように感じました。これは動画に挿入していた私達の音声聞きづらかったことが原因だと考えています。発音やそもそも使われていないフレーズを使っていたのかもしれませんが。この反省からネイティブへ意見を求めアドバイスをもらうことの大切さを学びました。また、フリートークでは現地の方のスピードに追いつくことが難しく的確に答えることができませんでした。しかし、わからないフレーズの意味を聞き、もう一度言ってほしいとアドリブで言うことができました。自分の中で大きな成長でした。

oecdのために準備を進めた半年はあっという間でした。もう少し粘ってクオリティを質の高いものにできたんじゃないかなという思いもあります。ただ、これまで外国の方を見ている立場だった私達が今度は外国人としてプロジェクトに参加できて本当に良かったなと感じました。この立場になってみないとわからない孤独感や、意思の疎通をできるかの緊張感、そして、ネイティブの方をリスペクトする気持ちなど様々な気持ちを初めて知ることができました。

今後も国際関係に興味があるのでこういった場면을体験することがあると思います。その時、今回の体験を思い返してもっと沢山のひとと楽しく交流死体という気持ちも一番強くもって参加していきたいと思います。

この活動で自分たちの学校の課題点を見つけ、韓国の学校と共有し自分たちがどのようにしていきたいのか、その為に何を必要があるのかを深く考えることができました。自分自身、課題点について考える機会が少なく難しく感じました。今回は教育分野について考え、自分たちの発表が代表として世界に発信されることに責任を感じました。また、これらを韓国側と共有する際に英語を使ってコミュニケーションをとらなければいけなかったのも、翻訳機器を使用することもあったし周りの友達に頼ってしまうこともあり、もう少し単語量を増やして、スピーキングの力を伸ばしていくことが課題だと感じました。このプロジェクトを通して自分自身今まで挑戦したことがないことに挑戦し、自分にすることができるのかという不安がたくさんありました。この機会に失敗を恐れず挑戦することの大切さ、そして自分が努力をすれば必ず受け取ってくれる人がいるということを学びました。これらの学びはこれから参加していくプロジェクトの中で自分が活かすこともできるし、周りの友達にも伝えていくことが大切だと思います。このプロジェクトに参加することで自分にとってたくさんのいい経験をする事が

できました。このような機会に自分が参加できたことがとても嬉しいし、また参加できることがあれば積極的にしていきたいと思いました。

頑張ったことは簡単な文法を暗記することです。自分自身知っている文法が少なかったの友達とかと一緒に覚え合いました。プロジェクトを通して自信がついたと思うことは友達と覚えあった文法を実際に使ってみたときに相手に通じたことです。自分が頑張って覚えたことが相手に通じるという喜びがとても自分の中で自信もついたり、とても嬉しかったです。難しかったことは、相手の英語を聞き取ることです。元々私はリスニングが苦手なので相手の英語を聞き取るのが困難だったけど周りの人と聞こえた単語を言い合いながら頑張って理解しました。今後の人生に活かしたいことは、簡単な文法などを暗記したのでその文法は忘れないように常日頃から英語で話すときに使いながらリスニングがあまり出来ないことを改めて知ったので英語で映画を見たりしながら更にリスニングを鍛えたいと思いました。

私が今回の OECD の活動を通して 1 番感じたことは「楽しかった」です。まず第一に頑張ったことと難しかったことは「コミュニケーション」です。韓国的高校と協力して「それぞれの国の一日」というテーマで動画を制作したのですが、お互い言語が違うので、自分の伝えたいことが伝わらなかったり、自分の伝えたいものとは違うもので伝わってしまったりと様々なコミュニケーションという面で困難に直面しました。ですが、自分の文法が壊滅的でも単語を言うだけでも相手には伝えることができ、「相手に伝えたい」という思いが大切なんだなと思いました。次にプロジェクトを通して成長したこと・自信のついたことは、柔軟性です。自分たちの MVP である動画の制作の面で計画通りに進まないことが多々ありましたが、その都度、状況に応じてアプローチを変えることで、最終的には目標を達成することができました。この経験から、困難な状況でも冷静に対処する力、つまり柔軟性が身についたと感じました。今後の活動においてもこの経験を活かし、さらなる成長を目指していきたいと思います。

私が OECD のプロジェクトを通して成長できたことは、自分から積極的に発言し、コミュニケーションを取ることの大切さを学びました。私は、自ら前に出て発言、話すのが得意ではなかったのですが、月に 1 回あるミーティングや韓国の方たちとの交流で自分から話しかけることができ成長できたと思います。特に蔚山の方たちとの交流では、一緒に熊本城や城彩苑を周り、大学の学園祭にも出店し、交流を深めることができました。たくさんの思い出を作れて、新しい知識を得たり、教えたりすることができ充実した 3 日間になりました。ミーティングでは約 1 時間という短い時間の間で議題について話し合うのは難しく、上手く伝わらないこともあったけど本番では無事に MVP を発表することができて嬉しかったです。オンライン上での話し合いで直接会って話すこと

はできませんでしたが仲を深めることができとてもいい経験になりました。これから、周りの人にも海外の方と話すことの大切さや楽しさを広げていきたいと感じました。

私はこの OECD の活動を通して、問題について深く考え、それを共有し、発表につなげるということを頑張りました。この発表という部分はとても当たり前のことと思いますが、すごく難しく、いざカメラや韓国の方、パリにいる方を前にするとすごく緊張してしまい、黙ってしまうことが多かったです。しかし、前回の自分を超えるためにと、自己紹介からそれに対する受け答えを特に頑張りました。私はこのプロジェクトを通して、外国の方ともコミュニケーションを取れる楽しさを改めてものすごく感じました。オンラインでの参加でしたがそれをも感じないほど世界の人と繋がれたなと感じています。このプロジェクトを通して自分はもっと事前準備をしてもっと答えられたらなと思いました。中にはわからない単語もあったのもっと単語の練習をしようと思いました。私はこの世界中の人と繋がれたことを高校生活で終わらせるのではなく、進学してもずっと続けたいと思いました。本当にありがとうございました。

(7) インドの高校生とのオンライン交流

ア 日時：2024年11月11日（月） 5・6限目

イ 場所：視聴覚室

ウ 概要

インドのデリパブリックスクールとオンラインにて国際交流を行った。在インド大使館の方にもオンラインにて参加していただき、まず、ネパール協会よりマダンさんをお迎えして、南アジア（インド・ネパール）について説明をしていただいた。1年生の発表の代表を決めるために生徒の皆さんは授業でスライド作成や発表を行い、それぞれ素晴らしいプレゼンテーションを行った。その代表5グループが英語で「熊本市の紹介」「熊本ツアーの紹介」「日本文化の紹介」をしました。インドからは日本語でインドの祭りについて教えていただいた。今までなじみの薄かった南アジアへの興味が湧き、英語でコミュニケーションを取る難しさと楽しさを感じることができた。

エ 生徒の感想

代表の人たちの発表は、インドの人も喜んでくれていてとても良かった。それを見て、自分たちの発表はもっと力を入れて取り組むべきだったと思った。インドの人たちと交流してみて語学力の差に驚いた。自分たちも海外の人と交流するときはその国の公用語のボキャブラリーを増やして相手に失礼にならないようにしたいと思った。今日の交流を経て日本人とインド人は少し似ているところがあると感じた。

インドの方々に向けて熊本のことを紹介するために熊本の観光地を調べました。熊本に住んでいるけど調べているときに知らなかった観光地を知ることができて良かったです。発表でも熊本の魅力を自分なりに伝える事ができたと思います。みんなの発表を聞

いて私が知らない観光地もたくさんあったので今回知ることができて良かったです。また熊本の観光地だけでなくインドの様々な祭りを知ることができて良かったです。

より良い発表になるように工夫してスライドを制作した。英語を使うことで色々な国の人と交流ができるということを知って楽しかったです。こうやって交流することができてとても楽しかったし、なかなかない機会だと思うのでいい経験になりました。英語を使うことで色々な国の人と交流できることを知ったのでこれからも意欲的に英語を学んでいきたいと思いました。

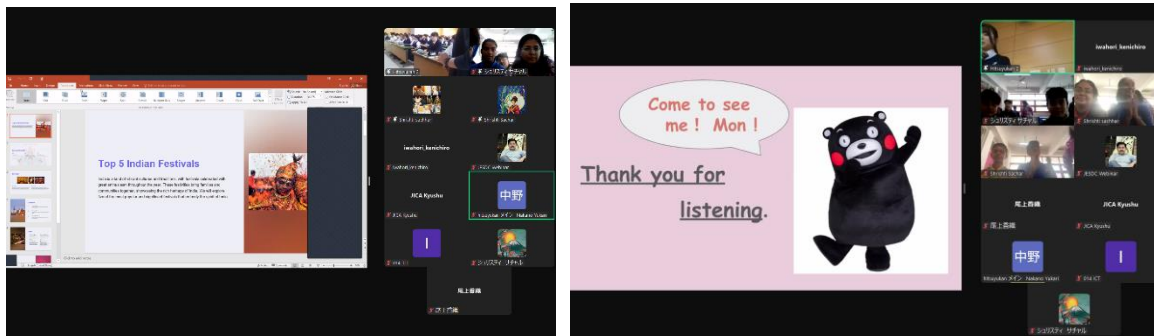
プレゼンを見やすく、順序立てて作ることができた。でも、プレゼンの内容をしっかり理解して、聞き手の人に伝わりやすい読み方やアイコンタクトがまだ足りていなかった。今日は実際に現地と繋いで交流をしたのでとてもインドと交流をしているという雰囲気を感じられた。また、英語は完璧に聞き取ることはできなかったけどお互いに頑張って伝えようという気持ちが伝わって良かった。

相手にわかりやすく説明するためにも話し方やイントネーションに気をつけて取り組むことができました。お互いに聞き取れなかったり、わからなかった部分が多かったです。改めて言葉でつたえることは大事なことだと感じました。インドの文化で女神を祝う日は甘いものを食べるなどたくさんの文化があることに驚きました。もっとインドについて知りたいと思うようになりました。

もっと熊本について知ってもらえるようなスライドを作れられたら良かったと思いました。インド人の人は日本語ちょっとでも話せるんだと思いました。背景に見える教室？の雰囲気が日本とは全然違って、少し興味を持ちました。インド人が日本について関心を持っているというのが実感できて楽しかったです。

熊本市の魅力をインドの方によく知ってもらうために色々な分野のことをまとめることが出来た。インドの方は日本語でお話してくださったので、私たちもせめて挨拶だけでもインド語で出来たらもっと良かったなと思いました。他の班の発表から熊本の魅力をよく知ることが出来たし、インドの皆さんの発表から、インドでは様々なお祭りが行われていてそれぞれ大切にされている行事だということがわかった。インドの方たちは日本語で発表していて、すごく上手でたくさん練習しているのが伝わりました。次にこのような機会があったらせめて挨拶だけでも相手の言語に合わせたいです。

班のみんなで熊本の伝統料理について深く調べ、協力しながら英語の文法や単語を確認しながらプレゼンを作り上げることができた。だけど、プレゼンを完成させることに意識しすぎたせいで、発表の練習ができなかった。だから、プレゼンを作り上げることに意識しすぎるのではなく、あくまで発表する時の資料として作っていただけるようにしたい。他の班の発表を聞いて自分たちにはない発表の技だったり魅力をたくさん知ることができた。インドにはたくさんのお祭りがあって、日本にも数え切れないくらいお祭りはあるけど、それを超えるくらいお祭りがあることを知って、やはりアジアには伝統がたくさんあるのだと思った。



(8) スコラ手帳の活用

第13回 手帳甲子園へ参加、イラストレータ賞受賞

ア 手帳甲子園とは

「NOLTY スコラ」を活用する中学生・高校生が自身の成長を表現する場である。この大会は、全国の生徒や先生、企業人が一堂に会し、交流する機会を提供する。手帳を通じて生徒が時間や習慣、思考や心を自己調整し、成長する姿を応援することを目的としている。

イ イラストレータ賞受賞

12月14日(土)、本校1年生徒が、NOLTY スコラ社主催「手帳甲子園」表紙部門において全国から選ばれた5人として出場した。プレゼン本番は、シンプルに見えて味わい深い、飽きのこない表紙デザインを目指し、スタンドグラスをモチーフに、水彩のぼかし・にじみと、マスキングシートを利用したことなどを動画も使用したプレゼンテーションで説明し、取組で得たことなどを堂々とプレゼンした。専門性の高い工夫点などが評価され、イラストレーター賞を受賞した。



(9) 第2回『熊本市議会 高校生議会』への参加

ア 日時：令和7年1月25日（土）

イ 参加生徒：12名（県内最多）

ウ 概要

第2回 熊本市議会 高校生議会 に本校生徒が参加した。本事業は、熊本市議会と市内高校生とが連携し、議会活動の体験や市議会議員との意見交換を通じた主権者教育の一環として行われている。本校2年生が「防災対策」の委員長を務めた。



エ 生徒の感想

私は高校生議会に参加して、高校生の声を行政に届けるという貴重な体験をすることができ、多くの学びを得られました。議会という場で自分が意見を出し、それについて他の人から意見を貰いながら議論をする、という形態は普段の学校の授業では取られないため、発言の際はすごく緊張しました。議会での発言を通して私はたくさんの時間をかけて準備をすることの大切さを学びました。

意見をする際には事前に学習をし、知識を身につけておく必要があります。私は環境保全の議会に参加し、熊本の環境の問題について考えました。様々な問題点があるということは学校の授業を通して知っていましたが、その解決策を考えることはできませんでした。そのため、どうすれば根本的解決に繋がるのか考えるのにたくさんの時間が必要でした。自分の意見が根拠に基づいていなければ、相手を説得することはできません。事前に時間をかけて知識を身につけ、根拠に基づいた提案をすることで、相手の興味や関心を引きつけることができるということを実感しました。

また、今回の議会を通してこれまでの自分の環境問題への無関心さを痛感しました。高校生にもできることはたくさんある、ということを再認識できたので、自分にできることから始めていきたいと思います。

今回は貴重な会にお呼びしていただきありがとうございました。政治は僕らに直接関わってくるもので特に僕のグループの議題になっていた、水や環境についてとなるとこれからこの街に住んでいく中で重大な問題になっていくと思います。そして僕らが1日議題について考え、案を出しどう運用に持っていくことができるのかまで議論することがとても大変だったことから、これを仕事にしている議員さん方はどれだけ大変かわかりました。だからこそ僕らが選挙に行くことで理想の民意を叶えていただける議員さんに票を渡し、政治に参加することがとても重要になるということを改めて理解しました。今までは別の世界の人間なのかと思うほど怖い印象を持っていましたが、実際にお昼の時間に話して見ると同じ人間なんだと思い親近感がわき政治を身近に感じることができました。僕は今回の会で直接政治に触れることにより政治的な視点で物事を考えることの難しさや、政治に対しての考えかたが変わる良い機会になりました。

今回は高校生議会という貴重な経験をさせていただきありがとうございました。中々熊本市のことについて関心を示していない高校生が多い中この高校生議会を通して熊本市の環境問題などについて深く考え深めることができました。今までの学習の中で自分の住む地域について知ろうというものはあったものをその改善点、また私たちにできることについて考えてみるのは私にとって初めてでした。市議会議員の方々が日々意見を共有しそれを改善するためにイベントを実施するなど、私には大抵できないなと改めて感じました。そして実際に議会に参加し委員長として他校の高校生と意見を交換した際、緊張はありましたがたくさんの新しいアイデアを聞きこんなアイデアもあるなと発見の連続でした。この経験を通して高校生議会という場をこれからも作っていただきたいなと感じました。ぜひ多くの高校生に経験してほしいです！この場が自分の住む地域に関心を持ったり、市議会について知るきっかけになるといいなと思います。改めて高校生議会という貴重な経験を用意していただきありがとうございました。これからも地域に関心をもち、いつか地域に貢献できるような人になりたいです

(10) 地域創生同好会の活動

ア 総合的な探究の時間の延長として、また地域教育協働活動の一貫として地域の課題を解決するためのプロジェクトを生徒主体で企画を立案し、実施することを目的として本年度発足。

イ 「地域を好きになるESD推進プロジェクト」(EP0九州) コアメンバー3名

・有識者による講義 8月20日(火)実施

講師 北九州市立大学 眞鍋和博 氏

公益財団法人 肥後の水とみどりの愛護基金 啓発事業部長 小島徹 氏

・フィールドワーク 9月7日(土)実施

TSMC(Jasm)周辺、道の駅大津、大津町おおづ図書館、イオン大津

・本校文化祭でのプレゼン発表 10月2日(水)(課題設定、アクションプラン)

・国際交流イベントの企画・実施 12月8日(日)

12月10日(火)

・中高生探究コンテストに応募(12月23日〆切)

・ESDフォーラムで登壇、一連の取り組みをプレゼン(熊本県開催)2月1日(土)

ウ「未来の地域人材育成事業」(中央区まちづくりセンター) コアメンバー5名

・まちづくり交流会① 8月21日(水) ジェイソンモーガン 氏

・まちづくり交流会② 10月23日(水) 土屋裕樹 氏

・まちづくり交流会③ 10月30日(水) 中川典彌 氏

・「やさしい日本語交流会」(高校生企画・国際交流イベント)12月 8日(日)

※企画会3回 11月8日(金)14日(木)、12月4日(水)

※リフレクション会 12月10日(火)



← 生徒考案の
中央区を巡るすごろく

エ「市長マニフェスト検証プロジェクト」（一般社団法人
熊本青年会議所） 2名

- ・「大西市長に直接政策提言！もし高校生が熊本の未来を考えてみたら」

11月10日（日）@熊本学園大学

- ・SDGs QUEST みらい甲子園熊本県大会 エントリー
- ・中高生探究コンテストに応募

オ「フェアトレードをテーマにした高校生の交流会」参加

- ・11月11日（月）@熊本県立熊本農業高等学校



(フェアトレードシティくまもと推進委員会)

- ・ ESD 探究チーム、市長マニフェスト検証チームが参加、登壇力「熊本城ホール5周年記念イベント企画プロジェクト」
- ・ 6月15日(土) @熊本城ホールエントランスロビー
- ・ 「イベントを企画するイベント」として、「高校生熊本企画会議」を実施
- ・ 誘致戦略課(熊本市役所)
- ・ Hub Craft
- ・ 佐藤かつあき氏(デザイナー)
- ・ 中川典彌氏(映像クリエイター)

キ「Hash! goFes.」12月28日(土)、29日(日)

- ・ KKT 主催: 熊本城ホール全館実施のイベントにて高校生企画のブース出店予定
- ・ リース、ハーバリウム、指紋アートなどの作品づくりワークショップと芸術コース美術系による似顔絵コーナーを出店

ク 生徒の感想

「やさしい日本語交流会」(高校生企画・国際交流イベント)

今回の交流イベントでは、一連の企画や当日の様子などを通して自分の住むまちに改めて目を向ける事が出来ました。特にイベント当日、参加者の皆さんが国籍や世代を超えて私たちの作ったすごろくで楽しんでくださったり、それぞれ話で盛り上がっているところを見たりする中で、とてもやりがいや達成感を感じました。もし今後もこのような地域交流イベントを企画する機会があったらまた参加したいです。

今回の五福公民館イベントでは、eスポーツやすごろくを通じて、熊本に住む外国人の方々と楽しく交流することができました。ゲームをきっかけに自然と会話が生まれ、互いの文化を知る良い機会になったと感じます。今後もこうした場を増やしていきたいです。

私はこの交流会に当日参加はできなかったのですが、企画・準備にかかわらせていただきました。交流会の企画をして行く中で、当日外国の方がどのようなイベントであったら楽しんでいただけるか相手の立場に立って考えることができとても学びになりました。今回のイベント企画で学んだことを今後の探究活動にいかして行きたいです。

年代や人種の違いはあっても、自分たちで考えたゲームで、参加者の方々が楽しんでくれているのを見てとても嬉しかったです。この経験を通して、色々な年代や人種のの人と関わることの重要性や大切さをよく実感できました。今回の反省点を改善してもっと交流するイベントの運営などを行い経験を深めたいと思いました。



(11) TGC 熊本 2024 への出演&協力

ア 日時：令和6年4月13日（土）

イ 概要

グランメッセ熊本で開催された TGC 熊本 2024。テーマは「BLOOMING ENERGY」であり、肥後六花を象徴とした多彩な花々が集結した。イベントには、人気モデルやアーティストが多数出演し、最新のファッションや音楽を楽しんだ。本校の音楽部は、SNS で 450 万人以上のフォロワーを持つ現役女子高校生アーティスト MINAMI とコラボレーションし、特別ステージを披露した。音楽部の生徒たちは、この機会に感動と笑顔を届けるために全力で準備を進め、見事に大役を全うした。また、本校の生徒がモデルとしても出演し、ランウェイを華やかに彩った。ほかにも多数の生徒がボランティアとして運営に携わった。

このような経験は、自己表現力や自信を高める機会となる。また、音楽部の生徒たちが特別ステージでパフォーマンスを披露することで、チームワークや創造力を育むことができる。さらに、イベント全体を通じて、ファッションやエンターテインメントの世界に触れることで、将来のキャリア選択に対する視野を広げることができた。生徒たちの成長にとって非常に有益であり、自己肯定感の向上や新たな挑戦への意欲を引き出す効果が期待される。

4 授業改善アップデート職員研修

(1) 熊本大学大学院教育学部 特任教授 前田 康裕 氏

(2) ア 目的：教師自身が今年度の自身の授業を振り返ることで、授業内容や指導法の見直しに繋げる。また、他教科教師の事例を参考にすることで、概念化し、本校教職員全体の主体的・対話的な深い学びの一層の充実を図る。

イ テーマ：『教科を超えて学び合う授業研究会 ～生徒の視点で授業を改善する～』

ウ 日時：第1回 令和6年6月19日（水）15：30～17：00

第2回 令和6年11月7日（木）15：30～17：00

第3回 令和7年2月10日（月）14：00～15：30

エ 概要

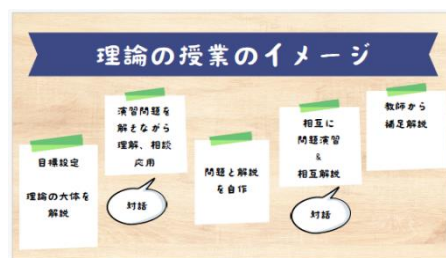
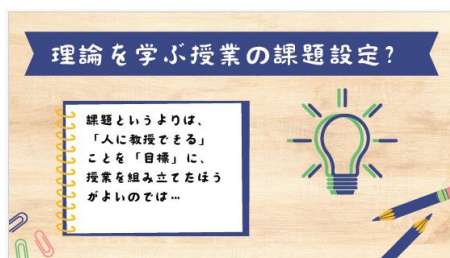
昨年度と同様に前田先生を招き、授業改善職員研修を3回実施した。この取り組みをすることで、年間を通して職員の授業に対する意識改革を促すためである。

まず、6月に自らの授業の問題、課題を整理し、それらを改善するための手立てを立て、11月の研修まで取り組んだ。次に、11月には、職員間公開授業として他教科の授業を参観し、自らの授業への一般化、概念化を促した。研修の中では、授業者の自評、参観者の良いところや質問・改善点の共有を行った。その後のグループ討議では、ファシリテーターを本校職員が担い、自らの授業に生かしていくことができる学びを深めたり共有したりできた。最後に、2月の研修では、これまでの2回の研修を通して、一年間の自らの授業を振り返り、自分が取り組んだことや変わったこと等をプレゼンにまとめ、4人のグループ内で一人3分の発表を行った。その後の2分間のフィードバックを受けた。その後、あらかじめ決められた代表は全体に向け、発表した。課題や悩み、良い点を共有し、学校全体で授業力の向上を図っていくことができた。

次年度以降も継続し、本校職員の授業力の向上につなげていきたい。



職員のスライドより



必由館高等学校 2024 年度 研修評価アンケート結果まとめ (2025/2/27 版)

作成：前田菜摘 (大分大学)

1. 調査概要

第1回目調査（以下、6月調査）を2024年6月19日の研修終了後に、第2回目調査（以下、2月調査）を2025年2月10日の研修終了後に、それぞれ実施した。

2. 回答者

6月調査では52名から、2月調査では63名から回答を得た。回答者の内訳は、表1に示す通り。両調査ともに3名を除き、いずれかの教科の指導を担当している。

なお、中学校や特別支援学校等の高等学校以外の学校での指導経験がある教職員（教育実習や塾講師等は含まない）は、それぞれ24名（46.2%）、30名（47.6%）であった。

表1 回答者の内訳

		6月調査	2月調査
役職	教諭・主幹教諭・指導教諭	37	47
	講師（非常勤含む）	12	11
	養護教諭	2	2
	実習助手	1	3
教職経験年数	1～3年目	5	6
	4～10年目	13	14
	11～20年目	9	16
	21～30年目	14	13
	31年目以上	11	14
必由館高校勤務年数	1年目	4	5
	2年目	3	4
	3年目	5	6
	4年目	2	5
	5年目	8	9
	6年目以上	30	34

3. 研修満足度と実践の変化

(1)研修満足度

調査実施当日に行われた研修の満足度を「とても不満」から「とても満足」までの6段階で尋ねた。なお、2月調査のうち11名は研修欠席者のため、研修満足度に関する回答者数はともに53名である。回答結果は、6月調査で、不満1名（1.9%）、どちらかといえば満足8名（15.4%）、満足28名（53.8%）、とても満足15名（28.8%）であり、2月調査で、不満1名（1.9%）、どちらかといえば満足7名（13.5%）、満足28名（53.8%）、とても満足16名（30.8%）と、概ね高い満足度が得られた。

6月調査、2月調査それぞれの研修満足度について、教職経験年数別に示したものが図1・2である。1～3年目の若手教職員の評価が最も高いが、31年目以上のベテラン教職員であっても全体として高い満足度が得られた。

高い満足度の理由として、自由記述からは、自身の授業改善につながったことや、他教科の取り組みを知ることができたこと、メタ認知的思考を意識できるようになったこと、モチベーションの向上などが挙げられた。一方、「不満」や「どちらかといえば満足」と回答したうち、ネガティブな理由については、

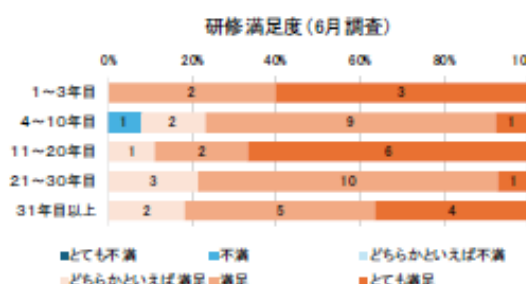


図1 教職経験年数ごとの6月の研修満足度

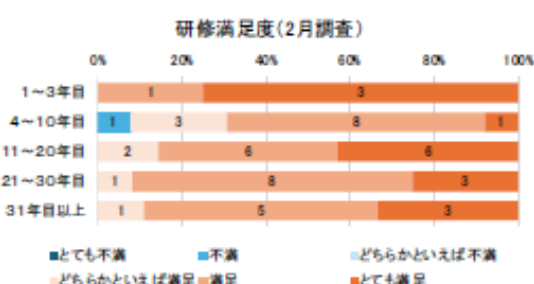


図2 教職経験年数ごとの2月の研修満足度

自身の学びとしてまだ不十分な点があること、同じ教科の教職員との共有を希望すること、昨年度と同じ内容であったこと、時期的に他の業務が気がかりであったこと、体調不良などといった理由も挙げられた。

(2)研修を通じた実践の変化

2月調査にて、今年度に入ってから自身の実践の変化について、「変わらない」「どちらとも言えない」「変わった」「とても変わった」の4段階で尋ねた結果が、図3である。「とても変わった(7.9%)」「変わった(74.6%)」を合わせると8割を越え、多くの教職員が自身の実践の変化を実感することができていた。

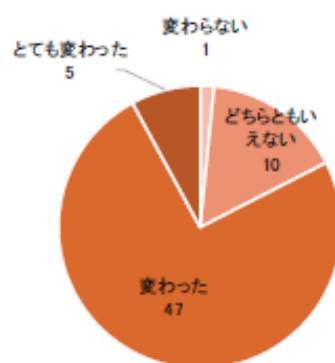


図3 実践の変化(2月調査のみ)

自由記述では、生徒の主体性や対話を意識した授業改善に取り組んだことや、意識的に改善サイクルを試みたことなどが挙げられた。一方、「どちらとも言えない」「変わらない」と回答した回答者の記述からは、大きくは変わらなかった、すでに変えてきている、挑戦・継続できなかった、まだ不十分な点がある、初めて担当する教科だった、といった点が挙げられた。

4. 現在の実践上の課題

現在、自身の実践に対して取り組むべき課題があるか、という質問に対する回答は図4の通り。「取り組むべき課題があり、すでに実際に取り組んでいる」の割合が34.6%(52名中18名)から、50.8%(63名中32名)となっており、授業改善プロジェクト等の取り組みを通じて実際に課題に取り組む教職員が増えたと考えられる。

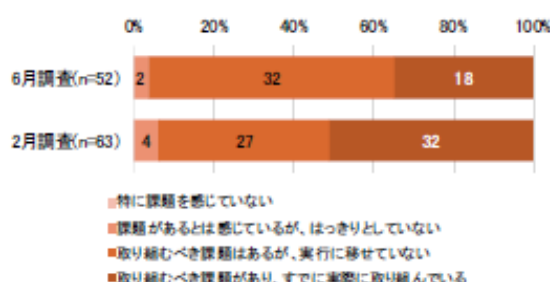


図4 実践上の課題の有無

また、その課題がどのようなものかについて、「生徒の対話を促す学習形態はどうあるべきか」「生徒が主体的に学ぶための学習課題はどうあるべきか」「生徒が学んだ内容や学んだ方法を知識にするための振り返りはどうあるべきか」「主体的・対話的で深い学びを促すためのICTの活用はどうあるべきか」「教職員同士の学び合いをどう活性化していくか」の5つの項目を設け、複数選択可で回答を求めた。回答者数に占める選択率を図5に示す。6月調査と2月調査ともに、「生徒が主体的に学ぶための学習課題はどうあるべきか」の選択率が60%を

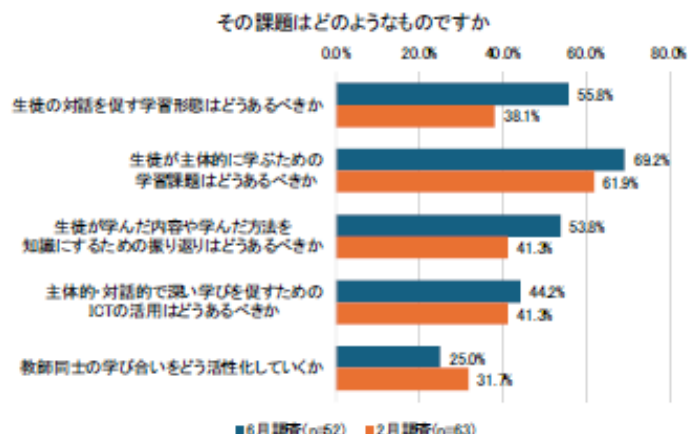


図5 課題の内容

越えており、特に関心の高いテーマであることがうかがえる。一方、2月調査では全体的に選択率が低下しているが、同時に複数の項目を選択した回答者の数が減少している（図6）。これは、取り組みを通じて課題が焦点化されたことによるものと考えられる。そうした中、「教職員同士の学び合いをどう活性化していくか」は、唯一、25.5%から31.7%と、6月調査から選択率が上昇しており、教職員間の学びに対する関心の高まりがうかがえた。

なお、「その他」として挙げられた課題には、受験につながる授業、委員会活動、カリキュラムの見直し、などがあつた。

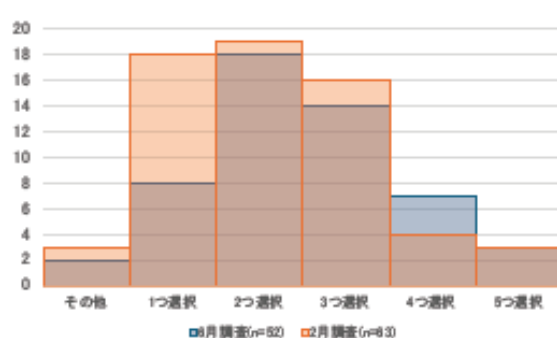


図6 課題の選択数の分布

5. 自己変革スキル

研修を通じた教職員の変化を「自己変革スキル¹」の観点から捉えるため、「普段、自身の実践をよりよくするために、以下のことをおこなっていますか」という設問を設け、「自分の実践の問題点を発見し、その解決のための課題を立てる（変革準備）」「現実的な目標を立てて、計画的に取り組む（計画性）」「詳しい人に聞いたり、書籍などから情報を集めたりする（資源の活用）」「意図的に新しい方法を試し、振り返って改善策を考える（意図的行動）」の4つの点について、「全くあてはまらない」から「とてもあてはまる」までの6段階で自己評価を求めた。6月調査と2月調査の回答結果を比較したものが図7～10である。6月調査の時点から肯定的評価の割合が多いものの、2月調査では、いずれの項目も「あてはまる」

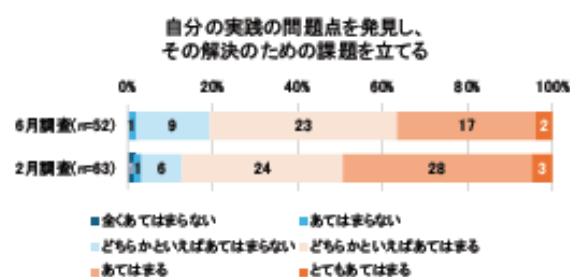


図7 自己変革スキル(変革準備)

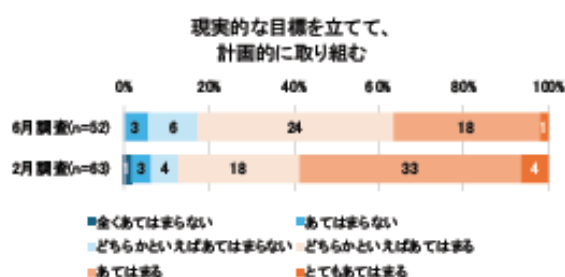


図8 自己変革スキル(計画性)

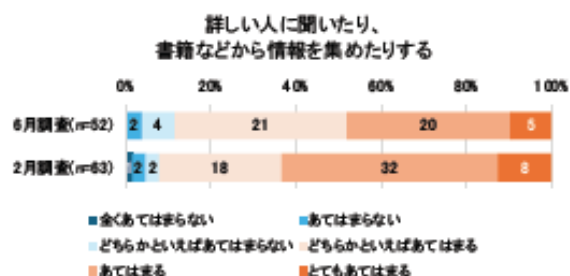


図9 自己変革スキル(資源の活用)

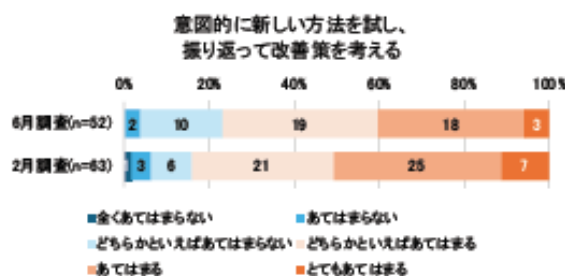


図10 自己変革スキル(意図的行動)

¹ 「自己変革スキル」の概念的枠組みには「松尾睦（2021）仕事のアンラーニング：働き方を学びほぐす、同文館出版」を参照した。

「とてもあてはまる」の回答者数が全体的に増加している（ただし、回答を1～6点の得点とみなしてt検定を行ったところ、平均得点の差はいずれも有意ではない）。実際に授業改善プロジェクトに取り組んだことにより、自己変革が意識化され、回答結果に反映されたと考えられる。

6. コレクティブ・エフィカシー

研修を通じた協働性の高まりを、「コレクティブ・エフィカシー²」の観点から評価するため、独自に「他の教職員と取り組むことで、この学校をよりよくしていけると感じますか」という設問を設け、「全くそう感じない」から「とてもそう感じる」の6段階で評価を求めた（図11）。

6月の時点でほとんどの教職員が肯定的に評価しており、全体的な回答傾向に変化は見られな

った。2月調査では、「とてもそう感じる」の回答が26名と最大になっているものの、「どちらかといえばそう感じる」の割合も増えており、わずかながらあるものの二極化の傾向が見られる。

これについて、自由記述では、協働の意義を実感する意見が多くを占める反面、目的や方向性が定まっていなかったことや、意見が聞き入れられないなど疑問をもつ教師の存在が挙げられている。こうした点は、個別的な業務の中では生じない課題であり、協働が求められることによって、同時に困難も生じていることがうかがえる。

7. 総合考察

今年度の調査からは、全体として研修に対する高い満足度が観測され、多くの教職員が実践の変化を実感することができていた。2月調査では、6月調査と比べて実践の課題を明確にモチベーションに向けて取り組む教職員が増えたことがうかがえた。自己変革スキルの観点から設定した項目では、いずれも肯定的な評価が増加しており、実際に自己変革のサイクルに取り組んだ経験が、自己評価の高まりに結びついたと考えられる。一方、コレクティブ・エフィカシーを想定して設定した項目については目立った変化はないものの、わずかながら二極化の傾向がうかがえた。これは、実際に協働的な取り組みが求められることで葛藤も生じることを示唆する結果と考えられる。また、目的や方向性の共通理解が得られていないことに対する課題意識もうかがえた。

これらの結果より、研修は幅広い年代層の教職員に概ね受け入れられており、実践改善に取り組むための習慣がやや定着してきているのではないかと考えられる。一方、マンネリ化や協働における困難を感じる教職員も出てきている。過年度の研修を経験してきている教職員も新しさを感じられるような配慮が求められる。また、個人のアイデアを実現するには、少なからず同教科グループの協力が必要になる場面も出てくると考えられる。異教科間の交流と同時に、同教科グループが集団的に変革に取り組むための支援も必要になるだろう。

他の教職員と一緒に取り組むことで
この学校をよりよくしていけると感じる

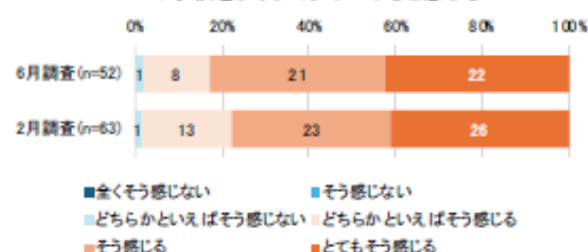


図11 コレクティブ・エフィカシーの変化

² 「コレクティブ・エフィカシー」の概念的枠組みは「Hattie, J., Fisher, D., Frey, N., and Clarke, S. (2021) Collective Student Efficacy: Developing Independent and Inter-Dependent Learners. Corwin Press, Inc. (ハッティ, J., フィッシャー, D., フレイ, N., クラーク, S. (著) 原田信之 (訳者代表) (2023) 自立的で相互依存的な学習者を育てるコレクティブ・エフィカシー, 北大路書房)」を参照した。

必由館高等学校 2024 年度 研修評価アンケート結果まとめ (2025/2/27 版)

作成：前田菜摘 (大分大学)

1. 調査概要

第1回目調査（以下、6月調査）を2024年6月19日の研修終了後に、第2回目調査（以下、2月調査）を2025年2月10日の研修終了後に、それぞれ実施した。

2. 回答者

6月調査では52名から、2月調査では63名から回答を得た。回答者の内訳は、表1に示す通り。両調査ともに3名を除き、いずれかの教科の指導を担当している。

なお、中学校や特別支援学校等の高等学校以外の学校での指導経験がある教職員（教育実習や塾講師等は含まない）は、それぞれ24名（46.2%）、30名（47.6%）であった。

表1 回答者の内訳

		6月調査	2月調査
役職	教諭・主幹教諭・指導教諭	37	47
	講師（非常勤含む）	12	11
	養護教諭	2	2
	実習助手	1	3
教職経験年数	1～3年目	5	6
	4～10年目	13	14
	11～20年目	9	16
	21～30年目	14	13
	31年目以上	11	14
必由館高校勤務年数	1年目	4	5
	2年目	3	4
	3年目	5	6
	4年目	2	5
	5年目	8	9
	6年目以上	30	34

3. 研修満足度と実践の変化

(1)研修満足度

調査実施当日に行われた研修の満足度を「とても不満」から「とても満足」までの6段階で尋ねた。なお、2月調査のうち11名は研修欠席者のため、研修満足度に関する回答者数はともに53名である。回答結果は、6月調査で、不満1名（1.9%）、どちらかといえば満足8名（15.4%）、満足28名（53.8%）、とても満足15名（28.8%）であり、2月調査で、不満1名（1.9%）、どちらかといえば満足7名（13.5%）、満足28名（53.8%）、とても満足16名（30.8%）と、概ね高い満足度が得られた。

6月調査、2月調査それぞれの研修満足度について、教職経験年数別に示したものが図1・2である。1～3年目の若手教職員の評価が最も高いが、31年目以上のベテラン教職員であっても全体として高い満足度が得られた。

高い満足度の理由として、自由記述からは、自身の授業改善につながったことや、他教科の取り組みを知ることができたこと、メタ認知的思考を意識できるようになったこと、モチベーションの向上などが挙げられた。一方、「不満」や「どちらかといえば満足」と回答したうち、ネガティブな理由については、

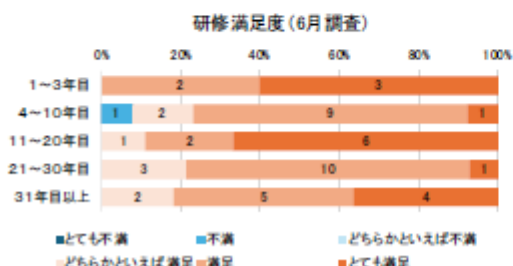


図1 教職経験年数ごとの6月の研修満足度

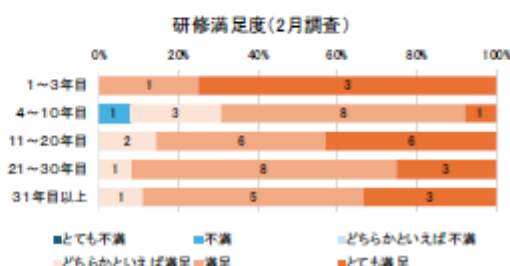


図2 教職経験年数ごとの2月の研修満足度

自身の学びとしてまだ不十分な点があること、同じ教科の教職員との共有を希望すること、昨年度と同じ内容であったこと、時期的に他の業務が気かりであったこと、体調不良などといった理由も挙げられた。

(2)研修を通じた実践の変化

2月調査にて、今年度に入ってから自身の実践の変化について、「変わらない」「どちらとも言えない」「変わった」「とても変わった」の4段階で尋ねた結果が、図3である。「とても変わった(7.9%)」「変わった(74.6%)」を合わせると8割を越え、多くの教職員が自身の実践の変化を実感することができていた。

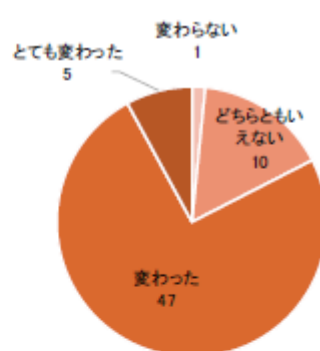


図3 実践の変化(2月調査のみ)

自由記述では、生徒の主体性や対話を意識した授業改善に取り組んだことや、意識的に改善サイクルを試みたことなどが挙げられた。一方、「どちらとも言えない」「変わらない」と回答した回答者の記述からは、大きくは変わらなかった、すでに変えてきている、挑戦・継続できなかった、まだ不十分な点がある、初めて担当する教科だった、といった点が挙げられた。

4. 現在の実践上の課題

現在、自身の実践に対して取り組むべき課題があるか、という質問に対する回答は図4の通り。「取り組むべき課題があり、すでに実際に取り組んでいる」の割合が34.6%(52名中18名)から、50.8%(63名中32名)となっており、授業改善プロジェクト等の取り組みを通じて実際に課題に取り組む教職員が増えたと考えられる。

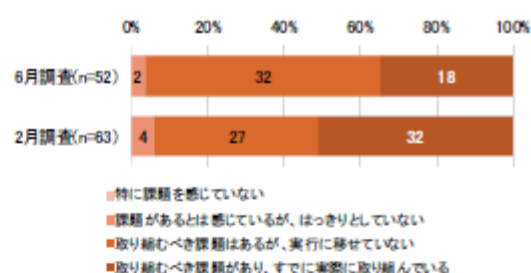


図4 実践上の課題の有無

また、その課題がどのようなものかについて、「生徒の対話を促す学習形態はどうあるべきか」「生徒が主体的に学ぶための学習課題はどうあるべきか」「生徒が学んだ内容や学んだ方法を知識にするための振り返りはどうあるべきか」「主体的・対話的で深い学びを促すためのICTの活用はどうあるべきか」「教職員同士の学び合いをどう活性化していくか」の5つの項目を設け、複数選択可で回答を求めた。回答者数に占める選択率を図5に示す。6月調査と2月調査ともに、「生徒が主体的に学ぶための学習課題はどうあるべきか」の選択率が60%を

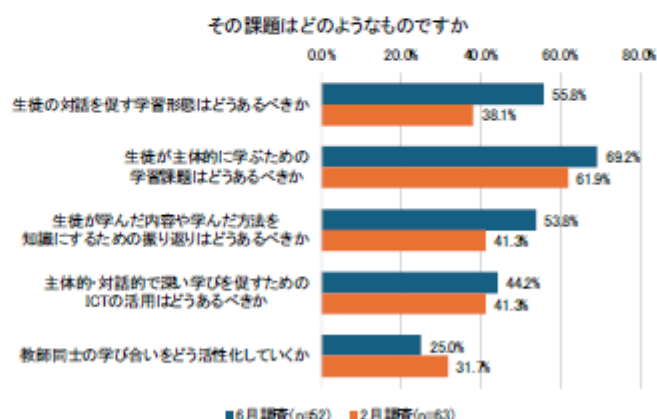


図5 課題の内容

越えており、特に関心の高いテーマであることがうかがえる。一方、2月調査では全体的に選択率が低下しているが、同時に複数の項目を選択した回答者の数が減少している（図6）。これは、取り組みを通じて課題が焦点化されたことによるものと考えられる。そうした中、「教職員同士の学び合いをどう活性化していくか」は、唯一、25.5%から31.7%と、6月調査から選択率が上昇しており、教職員間の学びに対する関心の高まりがうかがえた。

なお、「その他」として挙げられた課題には、受験につながる授業、委員会活動、カリキュラムの見直し、などがあつた。

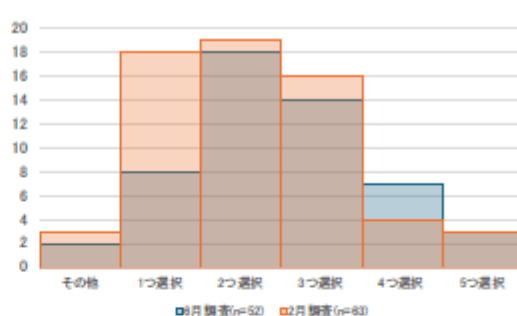


図6 課題の選択数の分布

5. 自己変革スキル

研修を通じた教職員の変化を「自己変革スキル¹」の観点から捉えるため、「普段、自身の実践をよりよくするために、以下のことをおこなっていますか」という設問を設け、「自分の実践の問題点を発見し、その解決のための課題を立てる（変革準備）」「現実的な目標を立てて、計画的に取り組む（計画性）」「詳しい人に聞いたり、書籍などから情報を集めたりする（資源の活用）」「意図的に新しい方法を試し、振り返って改善策を考える（意図的行動）」の4つの点について、「全くあてはまらない」から「とてもあてはまる」までの6段階で自己評価を求めた。6月調査と2月調査の回答結果を比較したものが図7～10である。6月調査の時点から肯定的評価の割合が多いものの、2月調査では、いずれの項目も「あてはまる」

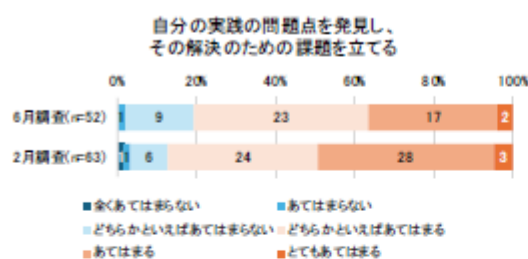


図7 自己変革スキル(変革準備)

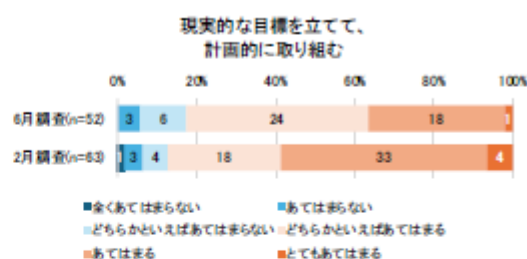


図8 自己変革スキル(計画性)

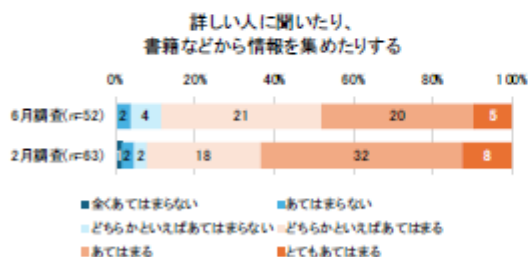


図9 自己変革スキル(資源の活用)

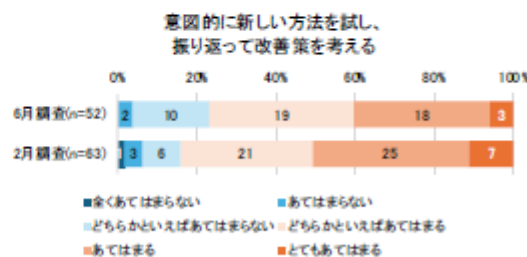


図10 自己変革スキル(意図的行動)

¹ 「自己変革スキル」の概念的枠組みには「松尾睦（2021）仕事のアンラーニング：働き方を学びほぐす、同文館出版」を参照した。

「とてもあてはまる」の回答者数が全体的に増加している（ただし、回答を1～6点の得点とみなしてt検定を行ったところ、平均得点の差はいずれも有意ではない）。実際に授業改善プロジェクトに取り組んだことにより、自己変革が意識化され、回答結果に反映されたと考えられる。

6. コレクティブ・エフィカシー

研修を通じた協働性の高まりを、「コレクティブ・エフィカシー²」の観点から評価するため、独自に「他の教職員と取り組むことで、この学校をよりよくしていけると感じますか」という設問を設け、「全くそう感じない」から「とてもそう感じる」の6段階で評価を求めた（図11）。

6月の時点でほとんどの教職員が肯定的に評価しており、全体的な回答傾向に変化は見られな

かった。2月調査では、「とてもそう感じる」の回答が26名と最大になっているものの、「どちらかといえばそう感じる」の割合も増えており、わずかではあるものの二極化の傾向が見られる。

これについて、自由記述では、協働の意義を実感する意見が多くを占める反面、目的や方向性が定まっていなかったことや、意見が聞き入れられないなど疑問をもつ教師の存在が挙げられている。こうした点は、個別的な業務の中では生じない課題であり、協働が求められることによって、同時に困難も生じていることがうかがえる。

7. 総合考察

今年度の調査からは、全体として研修に対する高い満足度が観測され、多くの教職員が実践の変化を実感することができていた。2月調査では、6月調査と比べて実践の課題を明確にもち解決に向けて取り組む教職員が増えたことがうかがえた。自己変革スキルの観点から設定した項目では、いずれも肯定的な評価が増加しており、実際に自己変革のサイクルに取り組んだ経験が、自己評価の高まりに結びついたと考えられる。一方、コレクティブ・エフィカシーを想定して設定した項目については目立った変化はないものの、わずかながら二極化の傾向がうかがえた。これは、実際に協働的な取り組みが求められることで葛藤も生じることを示唆する結果と考えられる。また、目的や方向性の共通理解が得られていないことに対する課題意識もうかがえた。

これらの結果より、研修は幅広い年代層の教職員に概ね受け入れられており、実践改善に取り組むための習慣がやや定着してきているのではないかと考えられる。一方、マンネリ化や協働における困難を感じる教職員も出てきている。過年度の研修を経験してきている教職員も新しさを感じられるような配慮が求められる。また、個人のアイデアを実現するには、少なからず同教科グループの協力が必要になる場面も出てくると考えられる。異教科間の交流と同時に、同教科グループが集団的に変革に取り組むための支援も必要になるだろう。

他の教職員と一緒に取り組むことで
この学校をよりよくしていけると感じる

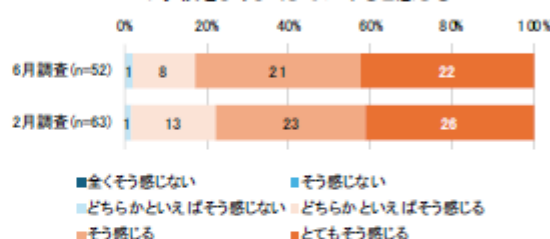


図11 コレクティブ・エフィカシーの変化

² 「コレクティブ・エフィカシー」の概念的枠組みは「Hattie, J., Fisher, D., Frey, N., and Clarke, S. (2021) Collective Student Efficacy: Developing Independent and Inter-Dependent Learners. Corwin Press, Inc. (ハッティ, J., フィッシャー, D., フレイ, N., クラーク, S. (著) 原田信之 (訳者代表) (2023) 自立的で相互依存的な学習者を育てるコレクティブ・エフィカシー. 北大路書房)」を参照した。

(2) 職員間公開授業の実施

ア 目的

生徒の活動状況や職員の指導の実際を一般公開し、自らの取り組みを点検するとともに、開かれた学校づくりを目指す。

授業を「見せる」または「見る」ことによりお互いに意見・情報交換を活発化させ、授業内容や指導法を見直すことで全教科全領域にわたる指導力の改善・向上をはかる。

授業改善やスキル向上の取り組みの一環として、これまでの職員研修の学びを実際に試み、教科を超えて共有する場とするとともに、その後の職員研修に繋げる。

(3) ICT活用能力向上校内職員研修

ア 日時：令和6年6月12日（水）

イ 実施内容

① クラスルーム ② フォーム ③ Canva ④ Miro

本校職員全体のICT活用能力を向上させ、授業や業務に活用できることをとして、各部と協力して職員研修を実施した。職員の力量の個人差やニーズを知るために事前にアンケートを取り、上記内容の4つを設定した。講師も本校職員が務め、日常での活用事例の紹介や基本操作方法の説明を行った。その後は講師による個別対応や職員間での教え合いを行ったことで、職員の力量とニーズに合った研修となった。

(4) 株式会社 夢をかなえる研究所 代表取締役 白石 裕子 氏

ア 日時：令和6年7月5日（金）13:30～15:00

イ 目的

個別最適な学びと協働的な学びの両立を目指し、教師がより一層、対話力とファシリテーション力を高め、生徒のやりたいを引き出し、カタチにしていけるようにすることを目的とする。

ウ 演題：「教育現場に必要な対話とファシリテーション」

～言いたいこと、言いにくいことを相手に伝えるためには～

エ 概要

対生徒、対保護者、職員同士等の人間関係の中で、対話とファシリテーションをできるようにするために職員研修を行った。講義とワークショップを行うことで言いたいことや言いにくいことを相手に伝えるためにはどのようにすればよいかを職員は学ぶことができた研修となった。

(5) 平井総一郎先氏との情報交換会

ア 日時：令和7年3月25日（火）

イ 実施内容

合同会社未来教育デザイン代表社員・株式会社情報通信総合研究所特別研究員である平井総一郎氏と情報交換を行った。

平井総一郎氏は、茨城県で小中学校教諭、教頭、校長、指導主事として33年間勤務され、現在はICT機器活用に関するコンサルティングを中心に活動されている。また

各自治体、私学の教育アドバイザーや複数の省庁の教育関係の委員も歴任されており、地方からの教育改革の推進に取り組まれている。本校の取り組んでいる普通科高校改革事業およびDXハイスクール事業について、地域情報化の専門分野や教育現場におけるICT機器環境整備などの面について、ご助言をいただいた。

＜助言いただいた内容＞

- ・探究学習に力を入れる・・・大学の総合型推薦（東北大学）、「調べ学習」になっていないか、探究＝〇〇×〇〇
- ・ITパスポート・・・情報Ⅰの内容とリンクしている
- ・進路指導について・・・大学の追跡調査（卒業率など）、アメリカでは行われている
- ・理数探究アセスメント（IGS社）・・・探究力測定
- ・英語教材

5 外部講師による講義・講演（生徒対象）

（１）NPO法人結び手代表理事 福岡洸太郎氏

ア 日時：4月30日（火）

イ 演題：「国際理解に必要なこと」

ウ 概要：国際コースの発展的解消、必由学での多文化理解に通じる取り組みの一環として、文理総合探究科1学年全クラス（310名）及び2・3学年国際コース（80名）を対象に日本とインドの比較を含めながら国際理解に関する講演を行った。

気候や暮らし等の一般的な比較から宗教や女性差別等の歴史的・文化的背景が関わる事柄についてまで興味深く聞かせていただき、このことを知り、多文化理解の重要性や自分がどのように行動できるかを生徒たちは深く考える契機になった。

（２）Y'sReading 代表取締役 熊本大学医学部 教授 中山 善晴 氏

ア 日時：令和5年6月9日（金）14：35～16：30

イ 演題：『「自己表現としてのプレゼンテーション20×20」

～ペチャクチャナイトを使ってプレゼンテーション能力を身に付けよう～』

ウ 概要：本校では、プレゼンテーションスキルとして、ペチャクチャナイト方式を採用している。そこで、その権威である中山氏に本年度も文理総合探究科1年生6クラスに対し、必由学の時間内にプレゼンテーションについて講話をしていただいた。

ワークショップも含み、生徒たちは簡単なプレゼンテーションを実際に行ってみて、プレゼンテーション力向上の必要性や意義について学ぶことができた。

（３）アニメーター 松本 葵 氏

ア 日時：令和6年11月16日（土）

イ 目的

日頃の授業では経験できない、県内外で活躍されているプロの画家や漫画家の技術や考え方、作品に取り組む姿勢に触れる。また、実技講習を通じて、表現手法や制作概念を学び、表現の幅を広げ今後の制作に生かす。

ウ 対象：生徒

エ 概要

午前

テレビアニメ 1 話ができるまでの過程やどんな業種があるのかななどを説明
動画マン体験(間の絵を埋める作業)

午後

原画マン作業(キャラクターをお題をもとに動かす)
作品講評会
生徒と意見交換(キャリア等について)

オ 生徒の感想

アニメーションがどのように完成していくのかや、原画で重要なことなどを知れるとてもよい講習会でした。また、実際に顔を動かすシーンを描いてみて、よりアニメのすごさを体感することができました。

アニメーターの仕事にもいくつかの役割があって、面白い話を沢山聞けました。パラマンガでは話の構成や見せ方などを考えたり、原画作業では一つ前の絵からつながって見せるようにすることが難しかったです。

アニメーションを作るうえでのコツや、応用について学ぶことができました。コマとコマの間の動作を見る側が簡単に理解できるようにする工夫が、どれだけ難しいことを身に染みて実感しました。

アニメの作り方はもともと興味をもっていて、この機会を頂けたことがとてもうれしかったです。1000枚以上を描き続けるのは精神的にもきつい作業だと思いますが、アニメはいろんな方々にいろんな感情をもたらせる良い文化なので、これからアニメの文化は無くならないと思いました。

6 視察研修

(1) EDIX 東京(教育総合展)視察

ア 日時：令和6年5月8日(金)10:00~17:00

イ 訪問者：教諭 金井 拓(芸術科)

教諭 渡邊 竜己(理科)

ウ 感想

全体として、ハードウェアはDXに向けた通常進化。一方でAi等を活用した学習援、校務支援アプリケーションは大きく展開していることを感じた。インフラの整備を先にすることで、数年経って一般化する流れになるが、まずは理系人材志望者増に向けて、生徒がプロダクトに触れることが必要であり、その為の整備を念頭に進めていきたい。

(2) 浜松学芸高等学校視察訪問、生徒会との意見交換

ア 期日：令和6年12月13日(金)13:30~17:00

12月14日(土) 9:00~12:00

イ 訪問者 主幹教諭 森田 勇(体育科)
教諭 山副 文香(家庭科)
教諭 黒岩 義史(地歴公民科)
実習助手 宮本 恵子(家庭科)
生活デザインコース1年生3名

ウ 視察目的

総合的な探究の時間において先進的な取り組みを実施している高校を視察することで、新たなカリキュラムや実践内容を学び、本校の教育活動の参考にするため。また、視察先の教育現場での成功事例を参考にし、地域や学校の実情に適した具体的な改革案を模索する機会とするため。

エ 学校の概要

浜松市内中心部(浜松駅よりバスで10分)に位置する私立高校である。1学年が普通科6クラス(特進コース)の合計196名、探究創造科2クラス(地域創造コース、科学情報コース)の合計60名、芸術科2クラス(音楽、美術、書道コース)の合計70名で、全6コースに分かれている。キャッチフレーズとして「TKG：楽しく、賢く、学芸ライフ!」を掲げ、学びの3本柱として、①授業での学び②教師との対話③探究活動を重視している。

〈新しい学科創設までの経緯〉

- ・2017年 … 課外活動として「探究活動」開始(週1時間)
- ・2020年 … 地域創造コースを創設
- ・2024年 … 探究創造科を創設

オ 視察内容

(ア) 〈おにぎりプロジェクトの成果報告会〉

① 概要：

地域の食材を使ったおにぎりをつくり、地域をPRすることを目的としたプロジェクトである。

地域創造コースの1年生が行うプロジェクトで、今年が5回目となる。参加高校は浜松学芸高校、青森中央高校(録画での参加)、京都開建高校、北九州市立高校の4校で、全9チームであった。1チームが4~5人で構成されていた。

② 発表の様子：

最初にYouTubeに投稿されているプロの動画を生徒が真似て作成したオープニングムービーが流れた。ラップ調の曲に合わせてライブのように掛け声を出しながら会場のボルテージを上げていた。発表では原稿を全く見ずに話しており、クイズや

演劇的な要素を入れるなど、聴衆を引き付ける表現力とパフォーマンスを見せ、聴いていて飽きのこないプレゼンばかりであった。基本的に発表は3分間で、スライドは12枚程度であった。発表項目の中には販売するターゲットや原価の計算など具体的な内容が入っていた。どのスライドも文字の羅列はなく、1スライド1フレーズで非常に分かりやすいスライドのデザインになっていた。

③ 評価の方法：

会場での人気を図る「ギャラリー投票」と実際に飲食店を経営する企業（約15社）からの採用を行う「企業採用」の2種類があった。プレゼン後、実際に試食を行ってもらい、全種類のおにぎりを食べられるようにしていた。試食の際に質疑応答を受け付ける形にしており、様々な対話がなされていた。ギャラリー投票では生徒や審査員がシールをホワイトボードに貼る形式で、企業採用は企業側が採用するチームの名前を記入し、封筒に入れる形式だった。

[おにぎりプロジェクトのチラシの一例]



(イ) 〈教職員間での情報交換会（浜松学芸高校、姫路飾西高校、北九州市立高校）〉

○おにぎりプロジェクト全般について

Q. プレゼンの指導はどのように行っているのか？

A. プレゼン指導については、基本的に教員は指導していない。部活で探究をしている生徒が教員からプレゼンのノウハウを教わり、それを他の同級生や後輩に伝えることでプレゼンが上達している。部活で探究を行っているのは各学年 10 人くらいである。先輩から後輩へ発表のノウハウを伝える文化の中で学んでいる。

Q. どうやって多くの企業と連携したのか？

A. ほとんど担当職員が営業をして連携の協力をお願いしていた。もともと行きつけのお店であったり、そのお店の人からの紹介で出会ったりするなどで人脈が広がり、連携先が非常に多くなっていた。ただし、生徒と企業が直接やりとりするのではなく、必ず教員が間に入るようにしている。連携するにあたって心がけていることは「Win-Win」の関係である。学校側だけでなく、企業側にとってもメリットのある関係性でないといけないことは心がけている。自治会長が高校の地域教育コーディネーターになって頂いており、助けられている部分大きい。

Q. おにぎりプロジェクトでは家庭科の教員は関わっていないのか？

A. 家庭科の教員はおにぎりプロジェクトでは評価と審査を行っている。調理室を使わせていただくので、そこは年度初めに家庭科の先生と綿密に打ち合わせをしている。

Q. 予算はどうしているのか？

A. 総合的な探究の時間に割り当てられている教科費で材料を購入している。ただ、その予算を超えた場合は受益者負担で生徒から徴収するようにしている。

○総合的な探究の時間のカリキュラムや考え方、入試について

Q. 個人で探究活動を行うことはあるのか？

A. 基本的に個人では行わない。チームで行う。個人で行うと教員が多くのテーマを抱えきれなくなるからである。チームを組む際には仲の良い人と組むと上手くいかないことが多いことを伝える。チームの人数はばらつきがあり、3～4 人の場合もあれば、大きなテーマを扱う関係で小チームが 3 つほど集まった 10 人のチームがある場合もある。年度によって「出席番号順」「誕生日」などの基準でチームの分け方は変えている。特に 4 月は心理的安全性を築くために 1 か月かけてレクレーション等を行いながら、徹底的にチームビルディングを行っている。チームで失敗を恐れず挑戦できる雰囲気づくりに徹している。

Q. 生徒の総合的な探究の時間に対する熱量の差をどのように考えているか？

A. 総合的な探究の時間の棲み分けとして、以下の 3 種類があると考えている。

① 週 1 時間の授業で行う。地域創造科以外の生徒がここに該当する。

1 時間で進めていくことはほとんど厳しいため、最低限の探究をしていく形になる。

- ② 週4時間の授業で行う。地域創造科の生徒がここに該当する。
- ③ 授業外の放課後に部活として行う。熱量のある生徒がここに該当する。

なお、この3つの種類はヒエラルキーではなく棲み分けであると捉えている。

入試の段階で探究を楽しんでもらえる生徒を取るようにしないと入学後がきつくなるため、

入試の前に簡単なミッションを与え、チームで協働するような体験会を事前実施し、適性を測る。

Q. どのような考え方でカリキュラムを組んでいるのか？

A. 教員の持つ教科外のリソースを活用し、11人がそれぞれの分野を担当している。例) 体育科の教員が食全般とジャムを担当、数学科の教員がミニ四駆と3Dモデルを担当。

抱えきれない範囲を超えた場合、できない旨を生徒に伝える。あくまで教員側が楽しい範囲で行うことを心がけている。

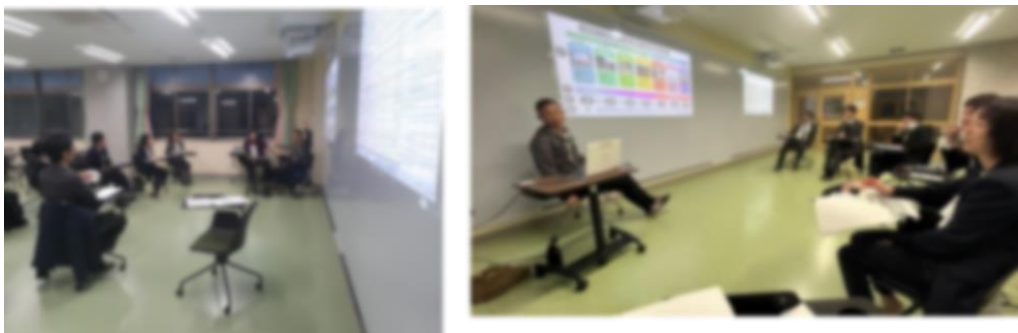
Q. 総合的な探究の時間の教員側の熱量の差はどのように考えているか？

A. 熱量の高くない先生に対しては「いて頂だけで有難い」という姿勢を貫く。その上でどうしたら先生方に楽しんでもらうかを考え、先生たちが活躍できる場をつくる。地域創造科の担当になって新たな一面が見られた先生もおられた(寡黙な先生と一緒に生徒と踊るなど)

Q. 様々なコンクールやコンテストの応募はどのように考えているのか？

A. 1年生では基本的に大会エントリーはしない。2年生では大会のリストをつくり、その中から1つ。以上応募することを条件としている。そうすることで受賞歴を積み上げていこうとしている。

ここ数年で非常に増えていて、大学側が主催するものが多い。そのため、生徒に進路希望の大学がある場合には大会があるかを調べ、参加するように促している。大会参加時に教授とコンタクトを取り、話す機会を設けるなどして総合型選抜入試や推薦入試で有利になるように戦略を練っている。



(ウ) 〈生徒・教職員交流会(北九州市立高校)〉

①北九州市立高校の取り組みの紹介

・今年から未来共創科ができ、5クラスで行っている。

- ・基本的に総合的な探究の時間では①商品企画②イベント企画③北九州市立大学との連携授業の3つを

柱としている。

- ・インタビューシップと呼ばれる企業訪問の授業がある。1人1社2日間企業訪問があり、準備やまとめなどを金曜日の5、6限目の総合的な探究の時間で行う。

- ・高校入試は主に4種類あり、生徒の強みをいかせる入試内容になっている（プレゼンテーション型、コミュニケーション型、実績型、一般入試）。

②おにぎりプロジェクトに参加した経緯

総合的な探究の時間が週に3回あるため、することが次第になくなり、停滞感があった。そのような状況の中で「おにぎりプロジェクト」への参加の誘いがあった。管理職と探究の担当教員の会議で急遽参加しようということになり、9月頃に有志を募ったところ、1、2年生合わせて20人程度集まった。11月に校内選考を実施し、優勝したチームが今回のプロジェクトに参加できるようにした。

わずか3か月の活動だったが、非常にスピード感があって盛り上がった。担当教員は有志で行った方が、スピード感があり、やっている方も指導している方もよいと感じていた。また、校内選考の優勝者は浜松に行けるという特典があったのもモチベーションアップにつながったと話していた。

② ワークショップ ～カードゲーム「QuestionX」～

- ・「QuestionX」という市販のカードゲームを実施した。テーマに関するカードと問のカードの2種類があり、良い問いを作り出した人が勝利できるカードゲームとなっていた。

- ・総合的な探究の時間の中でなかなか問いが思いつかない時に活用している。

参考 URL : <https://eduq.jp/for-school/quest/questionx/>



カ 本校の教育活動にどう生かしていくか

(ア) 生活デザインコースにどう生かしていくか（生活デザインコース担当より）。

- ・ 外部との連携や外出のために 1、2 年生の専門の授業を 7 限目のない 5・6 限目に連続で入れた方が良い。
- ・ 発表する機会や他を見に行く機会の確保が必要である。そうすることでプレゼン能力を高めることになり、総合型選抜での進学につながるのではないかな。
- ・ 学校説明会は生徒主体にした方が良い（パワポ、説明も生徒）。
- ・ 出前授業に出かけたり、オープンスクールで実際の授業を体験させたりした方が良い（入学してからのギャップをうめるため）。
- ・ 外部との連携の内容を動画で作って情報発信をしたい。
- ・ コンクールリストの作成が必要である。
- ・ グループでの活動をメインに持ってくる方が良いのではないかな。
- ・ 1、2、3 年生で教えあうなどの縦のつながりを持たせたい。

(イ) 総合的な探究の時間にどう生かしていくか

- ・ 発表の仕方について

「おにぎりプロジェクト」のプレゼンの仕方は非常に学ぶものがあつた。まず立ち位置が演題付近ではなく、スクリーンを挟んで立っており、インタビュアーの役とそれに答える役の人に分かれながら発表するなどのシーンが多く見られた。

また、段ボールを切り貼りしておにぎりの具材の被り物を制作するなどしており、ユーモアのある表現が多くあつた。本校のグループ発表は演題付近で原稿の棒

読みの場合が多いので、原稿を見ずに発表することや、壇上でのインタビューなどの掛け合いは真似をしていきたい部分であると感じた。

これまでの総合的な探究の時間を振り返ると、スライド作成の方に力を入れており、発表の練習に時間を取ることが出来なかったように思う。まずは原稿を見ずに発表することを目標に、何度も練習する時間を設定したい。

発表の見本を示せていなかったことも反省点である。動画を見せて発表の練習をさせたり、上級生の発表を見せる時間を設けたりするなどの工夫をしていきたい。

・グループでの探究について

今回の視察を通してグループで行う発表の可能性を感じた。本校の総合的な探究の時間は1人1人の探究の力を育てることを重視していることやグループの場合だとやらない生徒が出てくることを懸念していることもあり、個人での制作が主となっている。これまで約3年間取り組んできて良い点もあったが、できる生徒とできない生徒の差は埋まらないことや、全体の探究レベルの底上げには不向きな部分もあることが見えてきた。

今回視察した浜松学芸高校は個人での探究活動は全くなく、グループ（浜松学芸高校は「チーム」と呼んでいる）のみの探究活動であった。グループ単位だからこそ企業と連携した大きなプロジェクトを成功させたり、それぞれが得意分野を生かした探究活動を行うことが出来たりしているのではないかと考えた。

それを踏まえて、コース別で探究を行うときに、生徒同士の問いが似ている場合や問いが思いつかない生徒がいた場合はグループで探究させてもよいのではないかと考えた。仲がよいかどうか、ではなくあくまで「問い」を中心としたグループで探究活動を行うことも今後の探究活動の視野に入れたい。

・全体的なカリキュラムについて

浜松学芸高校の地域創造科は1クラスのみだから多様なプロジェクトを展開できていると言える。対して本校は9クラスの総合的な探究の時間を運営していく必要があるため、各先生方がゼミ活動のような形で展開することは教員数の関係上難しいだろう。分野に分けるとしても、今年度の経験から3つが限度のように思う。

また、本校の文理総合探究科は地域社会学科であり、「市役所連携」が大きな目玉である。この点を踏まえた時に、市役所のそれぞれの課の中で興味のある分野に先生方を配置するなどの工夫を、より丁寧に行っていく必要があると考える。

毎年、同じことを続けていくことの重要性も感じた。おにぎりプロジェクトは今回で5回目ということで、毎年同じことをしているから先輩が教えることが出来るのだと思う。必由館探究も続けてもよいのかもしれないと感じた。先輩が積み残した課題を引き継いで行うこともできるような仕組みづくりも視野に入れたい。

（3）広島県立広島観智学視察訪問

ア 期日 令和6年12月17日（火）13：00～15：20

- イ 訪問者 教諭 花川 貴三子 (英語科)
教諭 荒神 隼平 (英語科)

ウ 目的

- (1) 国際バカロレアの認定を受けている学校の教育活動および英語教育を学ぶ。
- (2) 英語以外の科目も使用言語を英語で指導している教科の枠を越えたカリキュラム・マネジメントやグローバルリーダーを育成していくための教育の在り方を学ぶ。

エ 学校の概要

広島県立広島叡智学園中学校・高等学校 (Hiroshima Global Academy; HiGA) は広島県豊田郡大崎上島町にある県立の併設型全寮制中高一貫校で、国際バカロレア・中等教育プログラム、ディプロマプログラム認定校である。令和元年に開校し、今年度で6年目となる新設校である。今年度になって中等部3学年、高等部3学年がそろそろ完成年度を迎えた。定員は中等部が一学年40人、高等部が一学年60人である。入学者の約半数が広島県出身、4割が県外出身、1割が高等部に在籍する外国籍の留学生である。

オ 視察内容

- (1) 学校概要・国際バカロレアプログラムの内容
- (2) 校内設備及び授業風景、生徒の活動の様子の案内
- (3) 質疑応答・情報交換

カ 視察の成果・まとめ

〈全体〉

「学びの変革」の目指すべきモデルとなる学校として、学びを通じて平和な社会づくりを実現し続ける存在となることのできる人材を育成するという教育目標の下、国際バカロレア教育を教育活動の主なツールとして、探究ベースの深い学びを展開していた。視察時には、中等部1年生から高等部1年生までが、IDU (学際的単位) に基づく学習に取り組んでいた。IDUとは、2つの教科や学問分野を関連付け、一つの課題に取り組む学習方法である。具体的な事例として、以下のような探究課題が設定されていた。

(例)

- 中1: 数学と保健体育「ピクトグラムで描く身の回りの形や動き」
- 中2: 社会と国語「君ならどうする? ~話し合いで見つける新しい視点~」
- 中3: 理科と音楽「心地よい音のレシピ」
- 高1: 英語とデザイン (家庭) 「大切な人のソウルフード」

これらの探究課題に対し、生徒は3日間にわたり、1日90分×3コマの合計9コマの授業で成果物を作成する。教員は教科横断的に連携し、共通する概念を整理しながら、生徒が学問分野ごとの視点を統合できるような探究課題を設計する。講義は最小限に抑えられ、要所でフィードバックを行いながら、生徒主体の学びが促進されていた。授業の課題は、生徒が多様な人々とコミュニケーションを取り、協働しなければ完結しないようにデザインされている。短期間のプロジェクトであるにもかかわらず、生徒は積極的に学習に取り組み、活発な意見交換を行っていた。生徒から直接話を聞く機会があ

ったが、特に中1生の多くが、自身の取り組んでいる課題の目的やゴールを理解し、論理的に説明できる姿が印象的であった。また中2生が、社会と国語のIDUにおいて、日本の政府開発援助（ODA）の是非についてディベートしているところを見学した際には、数値データや具体的事例を交えながら反駁や尋問を展開する生徒の姿に、批判的思考力や分析力の高さが見て取れた。また、高等部では14カ国から25名の留学生を受け入れており、多様な文化的背景をもった生徒達が共に学んでいる。高1生の英語とデザインのIDUにおいては、食文化というテーマを通して、日本人生徒が英語で留学生と議論しながらスライドを作成している様子や、それぞれの文化が持つ歴史的・社会的背景への理解を深めている姿が印象的であった。高2生はEE（Extended Essay）に取り組んでおり、日本語で8,000字、英語で4,000単語にも及ぶ課題論文を作成していた。生徒は文系・理系に分かれ、個人の興味に基づいたテーマを設定し研究を進めていた。例えば、将来、国際機関で人権擁護に関わる仕事を志す文系の生徒は、「エジプトにおける女子割礼の実態」をテーマに論文に取り組んでいた。また理系の生徒達は、自分で設計した模型や装置で実験を行い、数値データを収集しながら研究を進めていた。探究型学習を通じて生徒の主体性や論理的思考力を養い、多様な価値観を持つ人々との協働を促進する仕組みとなっていることが確認できた。

〈英語教育〉

中等部では、2年生までに中学校の教科書内容を修了するため、「5ラウンドシステム」を採用し、学内の活動の基盤となる英語の基礎力を養成している。3年生以降は教科書を使用せず、オンライン英会話等、多様なコンテンツを活用した英語の授業を実施している。到達度の確認として英語資格試験を取り入れ、中等部にはケンブリッジ英検、高等部にはIELTSの受験を奨励している。今年度は初めてIELTS協会から職員を招き、校内でのIELTS受験を実現した。また、修学旅行の代わりに、生徒の語学力に応じた海外研修を推奨しており、夏休み期間中のセブ島やフィジーでの語学研修、イギリスの高校での3ヶ月間の短期留学など、多様な選択肢が用意されている。

校内の環境も国際色豊かであり、寮内のルールを示す掲示物をはじめ、ほぼ全ての案内が生徒主導で作成され、英語で表記されている。寮生活や日常生活のあらゆる場面で英語を使用する機会が確保されていた。さらに、職員60名のうち1/4を占める15名が外国籍教師で、県採用のALT以外に、学校独自に採用した常勤・非常勤講師が指導を担当している。英語以外に、地理・歴史・数学・物理・化学・生物・芸術の授業が外国人教員によって英語で行われており、生徒が実践的かつ学術的な英語力を磨く環境が整っている。

〈ICTと図書の活用〉

生徒は入学前に１人１台の MacBook を準備し、授業ではこれを活用して学習に取り組んでいる。授業では、PowerPoint や Canva を使用したスライド作成、iMovie を活用した動画制作など、多様なアプリを駆使しながら学習を進めていた。

授業のスタイルは従来の座学とはまったく異なる。中１生、中３年生、そして高１生は、教室内の固定された席ではなく、許可されたエリア内でグループごとに異なる場所に分かれて、MacBook を活用しながら協働していた。リラックスした雰囲気の中で柔軟に学び、生徒が互いに議論を交わす様子が見られた。定期考査は実施せず、評価は、各單元ごとのテストや成果物によって行われている。教師は「ManageBac」というポータルサイトを活用し、個別に課題へのフィードバックを提供している。生徒や保護者も ManageBac に登録することで、各単元のフィードバックや提出物の状況をリアルタイムで確認できるようになっており、さらに学校からの連絡や書類も同サイトを通じて配信される仕組みとなっていた。

ICT の活用とともに、書籍や文献を活用した情報収集を重視しているため、図書室の運営にも力を入れている。図書室を見学した際、論文や探究活動に必要な最新の書籍が豊富に揃っており、原書も多く取り扱っていることが印象的だった。校務運営組織の中に図書部はなく、主任学校司書を主として、IB 教科指導等アドバイザーが図書室の管理・運営・企画に関わっている。時期ごとに学習テーマと関連した図書を選定し、購入が難しい場合は県立図書館と連携して、期限付きで必要な書籍を提供しているという工夫もなされていた。また訪問時は、ノーベル賞やアメリカ大統領選など、タイムリーな話題に関連した掲示物や書籍を集めたコーナーやが設けられていた。さらに北米関連図書の棚には車いす、義足、ヒジャブを纏ったバービー人形が飾られているなど、生徒たちが自然に時事問題や社会課題に関心を持つような仕掛けが施されていた。このような工夫が、図書室を単なる読書の場にとどまらず、生徒の主体的な学びを後押しする場に変えているように感じた。図書室が提供する資料や書籍を通じて、生徒たちが自分の興味を広げ、さらに学びを深めていくことができるという可能性を再認識することができた。

〈進路面〉

第１期生が今年度卒業するため、具体的な数字での実績を見ることはできなかった。訪問時には高３生の国際バカロレア（IB）の Final Assessment のスコア発表日であった。高３生は、進路選択において IB スコアを活用した海外大学受験や国内大学の総合型入試（国内大学では IB の模擬試験スコアを使って出願できる）を視野に入れている。また IB スコア次第で奨学金の有無が決まることがあるため、生徒も職員も、スコアの向上に力を注ぎ、結果に注目している様子だった。高１生に進路について尋ねると、「叡智学園に入学する前は留学を考えたことがなかったが、ここに来て周囲が海外大学を目指すことが当たり前に感じられるようになり、海外大学進学を意識するようになった。将来は貧困支援や子どもの福祉に関わる仕事に興味がある」と答える生徒や、「２年間スロバキアに住んでおり、中学・高校では日本の学校に通いたかったため、全

寮制の叡智学園を選んだ。両親は今もスロバキアに住んでいるので、ヨーロッパ圏への進学を考えており、将来は医療系の仕事に就きたい」と答える生徒がいた。国際的な課題に対する意識を高める授業や、生徒がそれを自分ごととして捉える機会が豊富に提供されており、グローバルマインドの育成とキャリア形成が一体となって進められていることが伺えた。

〈その他〉

叡智学園が位置する大崎上島は、広島駅から電車で約2時間の安芸津港から、さらにフェリーで35分ほどの距離にある人口6700人の離島で、島には娯楽施設やショッピングモール、24時間営業の大手コンビニも存在しない。年々過疎化が進行する中、令和2年度、施策の一つに「ひと創生」を掲げ、町と住民・関係機関が協働して「学びのある島」の価値創造に尽力している。

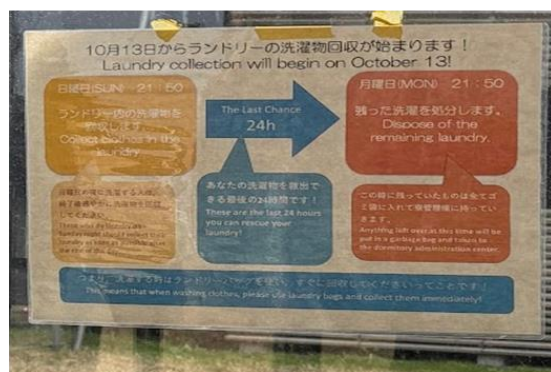
教師は島内に住む教員とフェリーで通う教員が混在している。学園敷地内に寮があり、中学生と高校生が学年を越えて共同生活をしている。寮の部屋には個室、仕切り付きの二人部屋、仕切りなしの二人部屋の3種類があり、半年ごとに入れ替えが行われる。寮のサポート体制には十分な人員が配置されており、教師は月に1回寮監としての職務を担うが、夜11時までは寮専任のハウスマスターが5名常駐している。中学生は入学当初、ハウスマスターの指導のもとで集団学習を行い、学習習慣を確立する。その他にも昼間は、地域住民から採用されたスタッフが数十名配置され、寮生活を支える体制が物心両面から整えられている。このことが、全国各地からの入学や、海外留学生の受け入れを可能にしている。校長先生が「寮生活は学園生活のアキレス腱だ」とおっしゃった通り、この特別な環境が生徒の学びに対する姿勢に大きな影響を与えていると感じた。

教師が赴任する際には、国際バカロレアプログラムを理解するためのワークショップが数回開催されるほか、週に1回30分程度の職員研修も実施されている。学園全体のグランドイメージは管理職が描き、その実現のために各分掌や教科が動いていく。国際バカロレアプログラムの厳しい学習に、生徒たちは懸命に取り組んでおり、教師陣は情熱を持ってファシリテートし、生徒とともに授業を作り上げている。その背景には、

「ここにこそ求める学びがある」と強い目的意識を持って入学した生徒たちの姿勢と、その期待に応えたいという教師たちの責任感と情熱がある。この島を訪れ、直接話を伺うことで、初めてその熱意の根底にあるものを実感することができた。

訪問を通じて出会った先生方は皆、目の前の生徒のために、今自分に何ができるかを真剣に問い続けておられ、職員がチームとなって知恵を出し合い、工夫しながら全力で職務にあたっておられた。普通科高校改革のただ中にある本校で、新たな文理総合探究的な学びを模索している私たちにとって、学ぶべき根源的な姿勢や、示唆に富む実践を学び、大いに触発された。このような貴重な機会をいただいたことに感謝するとともに、今回の視察で得た気づきを日々の教育実践にいかしていきたい。

〈写真〉

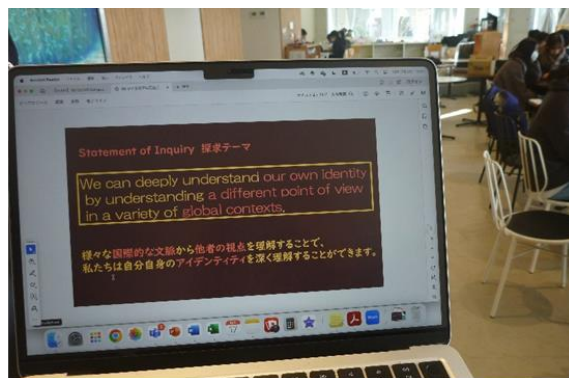


左：学園敷地内にある寮ユニットに分かれて生活する

右：生徒たちが作成した洗濯物に関するルールが日本語と英語で書かれた掲示物

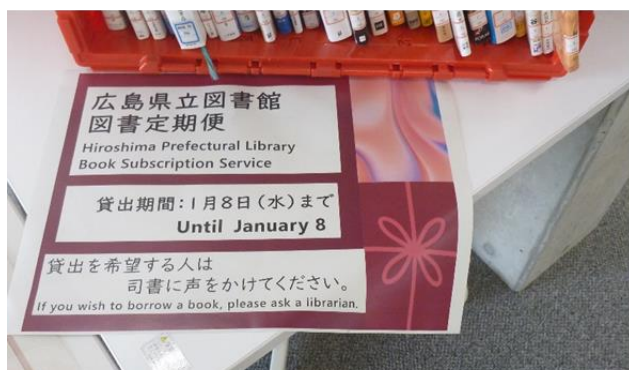


課題論文作成に必要な実験に取り組む高2 理系生徒



左：食堂で課題論文に取り組む高2 文系生徒

右：高1生の英語とデザインのIDUの課題を提示するPC画面と奥でグループワークに励む生徒



左：図書室に置かれた県立図書館の図書定期便
右：北米関連図書棚と多様性のバービー人形

(4) 佐賀県立牛津高等学校学校視察訪問、生徒会との意見交換

ア 出張者 主幹教諭 森田 勇

教諭服飾デザインコース主任 泉 洋子

生活デザインコース主任 村山 博子

1年9組生活デザインコース生徒3名

イ 日時 令和6年12月9日(月) 13:00 ~ 15:30

ウ 学校概要説明

○家庭科教育専門校として1963年、創立。

○衣・食・ヒューマンサービスに関するスペシャリストを育成。

○生活の質の向上に関する専門的知識や技能を生かし、地域と様々な協働しながら、学校及び地域の更なる活性化を目指す。

○生活経営科、食品調理科、服飾デザイン科の3つの学科からなる。

<生活経営科>

- ・2年次から「生活福祉類型」、「生活科学類型」に分かれる。
- ・「生活福祉類型」：介護・福祉に関する学習をし、介護職員初任者研修修了を目指す。
- ・「生活科学類型」：子どもの発達や保育に関する学習をし、保育士や幼稚園教諭を目指す。

<食品調理科>

- ・調理師免許を取得。卒業後はそれを生かし、就職する生徒が多い。

<服飾デザイン科>

- ・企画力やデザイン力を育成し、服飾産業でのスペシャリストを目指す。
- ・伝統工芸品「佐賀錦」を受け継ぐ学習にも取り組んでいる。



○家庭クラブ活動においては、全校生徒が会員となり、学んだことを生かして環境ボランティア活動等を行っている。

○部活動では、なぎなた部、男子ソフトボール部が県の強化指定校。文化系ではジャンベ部などの特徴ある部が複数ある。

家庭科教育を専門とした学校で、地域とのつながりが深く、それを生かしながらカリキュラムが構成されていた。学びを生活に生かすという家庭科の特性を踏まえ、また、地域の活性化につながる取組は大変参考になった。年々生徒数は減少傾向にあるとのことだが、学校の雰囲気は活気があり、生徒たちは自分たちの取組に自信と誇りをもって臨んでいたのが印象的だった。

エ 3年生「ファッション造形」授業参観 【体育館にて】

○12月14日のファッションショーに向け、3つのパート（スーツ、カクテルドレス、ドレス）に分かれて練習及び一斉練習。

○外部講師（大村美容ファッション専門学校）を招いて学習。

○実行委員長へ本校生徒から質問。

学科の行事に対して職員間の協力体制がしっかりと整えられていた。また、経費を削減するために近隣の工業高校に舞台装置を作っていただくなど学校間のつながりも強い

と感じた。さらにファッションショー本番の場所については、市役所からの支援もあり、毎年、安定して使いやすい場所の確保ができているとのことである。生徒が学習の成果を発表することで得られる教育効果を普段から地域や行政に広く理解してもらう必要があると感じた。



オ 関係者（本校生徒を含む）による意見交換

1. 授業づくりについて

○導入時に先の目標（ゴール）を伝えて、生徒の学習意欲を高めている。

○技術検定における3観点の評価については、特に「主体的な態度」において、着装をプレゼンテーションさせながらその過程を評価している。

○地域や企業との連携は以下の通り。

- ・小学校に出向き、調理やミシンのサポートを行っている。また、中学校では、認知症実習を通して高齢者を知る授業を行っている。
- ・保育園へ行き、音楽劇を披露している。



- ・公民館や NPO 法人、市役所等の企画に参加し、様々なボランティアを行っている。

○学校設定科目「起業家入門」（2、3 年生の希望者）では、2 年次にプレゼンテーションの方法やイベントの企画、3 年次では商品開発等を学習している。

各 35 時間、夏休みに実施。年に 2 回、3 つのコースと一緒に、空き店舗を活用し、それぞれが製作した商品の販売を行っている。

○専門科目においてはその多くを外部講師を招聘し、授業を行っている。

2. 中学生向けの学校説明会について

○体験入学の形で行っている。

「服飾デザイン科」：ミシンを使って巾着の製作 浴衣の帯結び デザイン画を着色

「生活経営科」：保育検定にチャレンジ！「おむつ替え」「折り紙」など

授業づくりについては、出前授業を行ったり、劇を披露したり、ボランティア活動を通して地域の活性化に努めたりするなどの外発的動機づけにより生徒の主体的な学びを促す手立てが工夫がされていた。このことは本校の生活デザインコースが今後、授業を通して更に発展を目指す上で大変参考になった。今回の訪問における一番の収穫と言える。また、外部講師の効果的活用も「社会に開かれた教育課程」という観点において大変参考になった。本コースの教育課程において社会に貢献できる人材となるよう社会とどのように関わるか、そのために人的体制をどう構築するか、今回の学びを生かしながらしっかり検討していきたい。

（4）船橋市立飯山満中学校視察訪問

ア 出張者 教頭 大山法治 教諭 松田純一、宮川和之、荒神隼平

イ 日時 令和 7 年 3 月 26 日（水）10：30～12：00

ウ 船橋市立飯山満中学校は、2023 年に文部科学省のリーディング DX スクール事業パイロット校に指定されたことをきっかけに 2024 年度に「生成 AI」を導入された。今回、教務主任の内藤先生（理科）と、生成 AI の校務活用・学習指導活用を中心に情報交換をさせていただいた。

<情報交換させていただいた内容>

- ・ Google サイトでペーパーレス化・・・職員朝礼はない
- ・ 学習の個別最適化×協働的な学び・・・その 1 つのアイテムとして「生成 AI (ChatGPT)」を導入
- ・ 単元内自由進度学習／反転学習・・・進度の近い生徒同士で学習（活動）を進める
教師はお助け役（ファシリテーター）
- ・ 自習にならないように・・・生徒のアウトプットを工夫、生徒自ら小テスト作成 (GoogleForm)
- ・ 公開授業では 5 つのグループを設定

<教科別>

理科：8枚のカードを提示して、「研究テーマ」を検討させる

ChatGPTに壁打ち（アドバイスをもらう）

国語：文章要約、構成比較などのアドバイスをもらう

英語：Skit（寸劇）作成、英作文のフィードバック、英語表現力（会話）のトレーニング

数学：小テストの結果を伝えて、個別の問題を提案してもらう

美術：資料から、今と昔の課題を考え、比較する・・・GPTsの活用

体育：チームのメンバーの特徴を伝え、チームの特性に合わせた作戦を立ててもらう

校務：3年生の面接練習、課題テーマや評価ポイントをアドバイスしてもらう

生成AIからのフィードバックが教師のサポートにもなる

・導入に向けての取組・・・職員研修を8回実施（外部講師）

エ 感想

今回の視察で、船橋市立飯山満中学校で生成AI導入に向けた準備や活用・成果等について学ぶことができた。校務・学習指導ともに「生成AIありき」ではなく、一つのアイテムとして使うことで、結果的に効果的な活用につながれたらと感じた。引き続き情報交換させていただきたいと思う。

（４）船橋市立飯山満中学校視察訪問

ア 出張者 教頭 大山法治 教諭 松田純一、宮川和之、荒神隼平

イ 日時 令和7年3月26日（水）14：00～12：00

ウ NTT e-city Laboは、各地域の社会課題解決に向けてNTT東日本グループが取り組むソリューションを体感できる施設である。NTT中央研修センター内にあり、新入社員の研修施設としても活用されている。ビジネスコーディネーターの小池さまに施設の案内・説明をしていただいた。

<見学した内容>

・インフラの保守・点検：ドローンを使って、遠隔で点検や測量が可能にする

・災害対策支援：災害時に安全な水の提供を可能にする、空気から水を作る装置

・デジタルアート：重要な文化財をデジタル技術で再現することで、新たな鑑賞方法などを提案

・スマートストア：次世代無人店舗「ピックスルー」で省人効率化（人手不足）に貢献する

・超小型バイオガスプラント：食べ残しなどの廃棄物を再生可能エネルギーや液体肥料に変える

・次世代農業：遠隔営農（レタスやトマトの栽培）、野菜自動販売機、生産者のサポート

- ・スマートキャンブ：災害時の応急拠点としても利用可能なトレーラーハウス
- ・メタバース：VR（仮想空間）、XR 技術を活用した遠隔作業支援

エ 感想

NTT の強みである「通信」を基にした最新技術はどれも驚くものばかりだった。他にも地域社会の課題解決に向けた取組が多くあり、そして今後も更新されて増えていくだろうということだった。「地域社会課題の解決」というテーマを体感することができ、これからの学生に求められる「創造力」や「課題解決力」の理解・育成のヒントとなる場所だと感じた。

NTT e-city Labo



災害対策(安全な水の提供)



デジタルアート



体験できるソリューション



7 広報

(1) 中学生対象学校説明会の開催

- ア 日時 令和6年8月1日(木) 9月28日(土)
- イ 場所 本校
- ウ 内容

中学生対象学校説明会には、1000人以上の申し込みがあり、前半・後半に分けた2部構成での説明会となった。リモート中継による学校全体説明や本校独自の探究活動、

学校設定教科である必由学等の説明を受けた後、生徒会執行部や広報委員、安全委員を中心とした必由館クイズで盛り上がった。その後、希望者対象の学校施設と部活動見学を行った。事後アンケートでは、説明がわかりやすく、さらにクイズで楽しく学校について知ることができたことや、本校生徒の優しく元気な対応について多くの感想が述べられていた。

また、9月28日（土）には芸術コースおよび生活デザインコースの体験入学も行われ、こちらにも多数の参加があった。参加中学生は、体験入学ならではの情報を聞き、各専門分野での実技体験、指導を受けていた。

たくさんの中学生に受検してもらえることを期待したい。

（2）芸術コース音楽系成果発表会

ア 日時 令和6年6月5日（土）、11月16日（土）、令和7年2月1日（土）

イ 場所 熊本市男女共同参画センター「はあもにい」

ウ 内容

第70回成果発表会を開催した。1年生9名、2年生14名、3年生9名が、日頃の練習の成果を披露した。特に3年生は、3年間の集大成としてドレスを身にまとい、華やかなステージで堂々とした演奏を披露。会場には温かな拍手が響き渡り、感動に包まれた。音楽を表現できる場があることに感謝しながら、この1年を振り返るとともに、新たな目標を胸に刻む貴重な一日となった



（3）第一回「必由書道展」【書道系】

熊本の書写・書道技術の向上を図り、創造力や書写・書道を愛好する心情を養い、豊かな人間形成に役立てることを目的とし、本年度より「必由書道展」を開催した。平素より書写・書道技術の向上を図られ、書写・書道を愛好される中学生の皆さんの学習の一助になればと考えてる。第1回目となる今回の「必由書道展」には、中学生の皆さんから179点の出品があった。



（4）学校説明会の開催

ア 日時 令和6年8月1日(木)

イ 概要

中学生対象の学校説明会を実施した。1000人以上の申し込みがあり、本校の注目度の高さを感じ、身が引き締まる思いであった。午前・午後の2部構成で行い、生徒会執行部や広報委員、安全委員とした生徒主体の運営で会を進め、クイズや説明、学校施設案内や部活動見学を行い、中学生からの事後アンケートでは、高評価をいただいた。次年度へ向けてよりよいものにしようとする生徒会の姿勢にも、感心させられた。



(5) 芸術コース・生活デザインコース体験入学

ア 日時 令和6年9月28日(土)

イ 概要

参加中学生は、体験入学ならではの情報を聴き、各専門分野での実技体験、指導を受けた。書道コースでは、第一回必由書道展を開催し、生活デザインコースではピンワーク特別講義の受講など、コースならではの取組がより一層充実してきていく。

(6) 芸術コース書道系制作展

ア 日時 令和7年1月21日(火)～26日(日)

イ 場所 熊本県立美術館分館

ウ 内容

今年度卒業の生徒による展覧会で、22回目の開催となる。今年度も、3年間の授業作品として、漢字、仮名、漢字仮名交じり、刻字、少字数、写経等を作成した。また集大成として大作を作成し、バラエティーに富んだ多数の作品を展示し、披露することができた。この大作作品は3月下旬にある熊日書道展に出品する。

また、本年度実施した「必由書道展」において優秀作品を約60点展示し、中学生の来場も見受けられた。受付をしながら色々な方と対話したり、制作意図を説明したりと生徒たちにとっても貴重な体験となった。

今後もさらに良い展覧会が開催できるよう、生徒・職員一同励んでいきたい。



(7) 芸術コース美術系制作展

ア 日時 令和7年1月21日(火)～26日(日)

イ 場所 熊本県立美術館分館

ウ 内容

第22回卒業制作展を開催した。3年生20名が卒業制作として制作したF100号やF80号の大作、B1のデザインの作品を始め、デッサンやポスター、キャラクターデザイン、サムホール大の人物油彩や水彩の花など、多様な展示となった。

熊本の観光地や特産品に因んだキャラクターを創作し、QRコードに携帯電話をかざすと、キャラクターが浮かび上がる専用アプリを開発した作品や、自主制作のショートムービー、松橋駅を破壊する怪獣の立体作品など、いつにもましてバラエティに富んだ展示となった。

県下には美術科や美術コースがひしめき合っているが、本校の特色を更に磨き上げ、他にはない魅力を発進していきたい。



(8) 生活デザインコース成果発表会

ア 日時 令和7年1月24日(金)

イ 場所 くまもと森都心プラザ

ウ 内容

生徒実行委員会を中心に一年間の学習の成果をステージ発表及び展示作品により発表した。今回は、服飾デザインコースとして第23回目、生活デザインコースとしては第1回目の発表会であった。実行委員長を中心にアイデアを出し合い、企画・運営を行ってきた。実行委員長は「一人一人がこだわりのつまった作品を製作し、魅せ方にもこだわり、私たちらしい発表をすることができました。」と挨拶した。デザインコースの生徒としての自覚とともに三学年の連携と団結を密にするよい機会となった。



IV 評価分析

1 目標

令和6年度も複数回調査を実施し、経過測定データの比較から生徒個人及び学校全体としてのコンピテンシーの変容を分析し、伸長につなげる。

2 Ai GROW（評価分析ツール）の実施概要

本委託事業における取組をととして、生徒及び教員の資質・能力の変容や、教育活動の教育効果を正確に測定し、可視化することで、客観的な評価分析を行うため、以下のツールを活用した。

名称	Ai GROW
提供事業者	Institution for a Global Society 株式会社（以下「IGS（株）」）
受検対象者	1年生 355 人、2年生 346 人、教員 69 人
経過測定データの比較時期	令和4年12月 令和5年11月 令和6年11月
当該ツールの特徴	IAT（潜在バイアス測定）技術を活用した気質診断と 360° コンピテンシー評価に AI の補正を加え、最大で 25 のコンピテンシーを定量的に測定することができ、本委託事業による成果を科学的な根拠に基づき検証することが可能となる。
計測内容	本委託事業の成果目標として設定している指標を検証するため、以下の内容について計測を行った。 ○気質（5 項目） ・ 内向性⇔外向性 ・ 保守性⇔開放性 ・ 平穏性⇔繊細性 ・ 独立性⇔協調性 ・ 自由性⇔自律性 ○コンピテンシー（15 項目） ・ 認知系：課題設定、解決意向、論理的思考、創造性 ・ 自己系：個人的実行力、自己効力、成長、興味、耐性、決断力 ・ 他者系：表現力、共感・傾聴力、寛容、影響力の行使 ・ コミュニティ系：地球市民 ・ その他：主体性、協働性、リーダーシップ、創造的思考力、協働的思考力

《令和4年度から令和6年度における経年実施結果》

本委託事業をととして身につけさせたい資質・能力（＝成果目標）を、「学校コンピテンシー」と定義し、以下のように計測・分析を行った。

学校コンピテンシー

	分野	コンピテンシー
①少人数によるクラス編制の実施による効果 →多様な価値観を尊重し、新たな価値を創造する力		
(1)自分とは考えや意見の異なる相手に対しても理解を示し、それを許容する態度が持てる能力	他者	寛容
(2)何らかの課題に直面しても、「自分ならできる」と自信を持って物事を進めることのできる能力	自己	自己効力
(3)他者に対して自分の考えや目的を伝えながら、ともに協働して物事を進めることのできる能力	他者	影響力の行使
②「学校設定科目必由学」の新設 熊本市役所(各課・室)、国内外NPO及び民間事業者等、地域社会の資源を活用した課題探究型学習の充実 →社会に関する理解を深め、地域の課題や魅力を見出す力		
(1)状況を的確に把握しながら「何をすべきか」「どうやって成し遂げるか」を自ら考え出せる能力	認知	課題設定
(2)興味のない分野のことであっても、情報を積極的に収集することのできる能力	自己	興味
(3)自分が住む地域や日本のことはもちろん、世界の一員として何ができるか考えられる能力	コミュニティ	地球市民
③探究活動等で収集したデータを科学的に分析・検証し活用する力の育成 →分野横断的に課題を分析し、論理立てて表現する力		
(1)道理や筋道に即して物事を深く考えることができ、複雑なことでも分かりやすく説明できる能力	認知	論理的思考
(2)自分の考えや思いはもちろん、どんなことでも相手が理解しやすいように伝えることのできる能力	他者	表現力
④教育効果を外部に還元するシステムによるエージェンシー・スクール →自己の興味・関心に応じて、生涯にわたって学び続ける力		
(1)何らかの課題に直面しても、「自分ならできる」と自信を持って物事を進めることのできる能力	自己	自己効力
(2)自らの意思によって行動を起こして計画を進め、何事にも自ら進んで取り組むことのできる能力	自己	個人実行力
(3)自分の考えと客観的な事実とを照らし合わせながら判断し、物事を決めることのできる能力	自己	決断力
(4)どんな難題に対しても「自分の成長につながる」と信じて積極的に取り組むことのできる能力	自己	成長

【IGS（株）作成報告書抜粋】

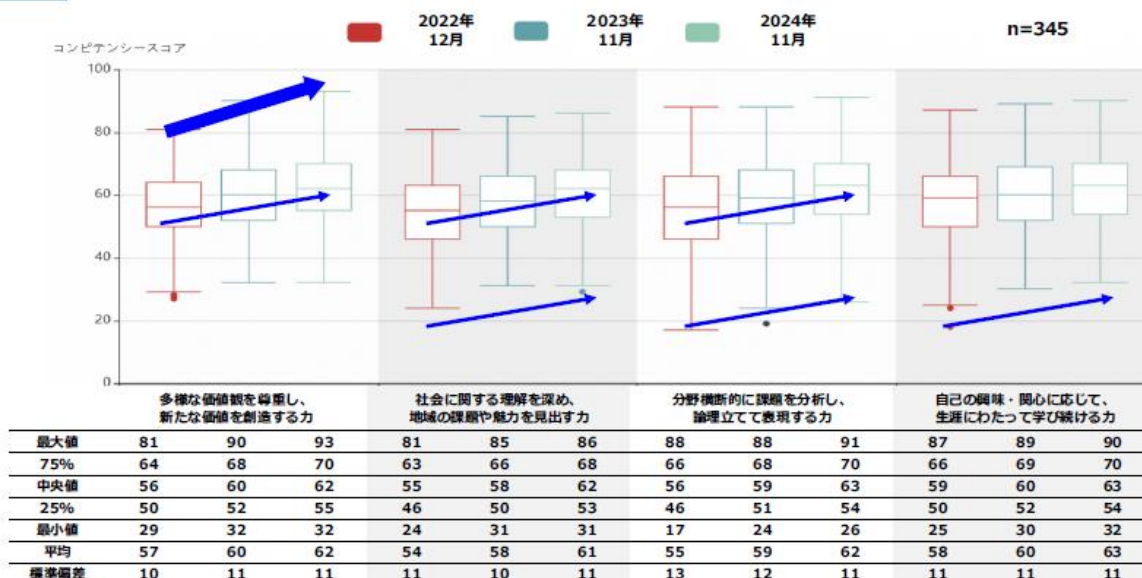
① 3年生の受検結果

受検結果サマリー_3年生

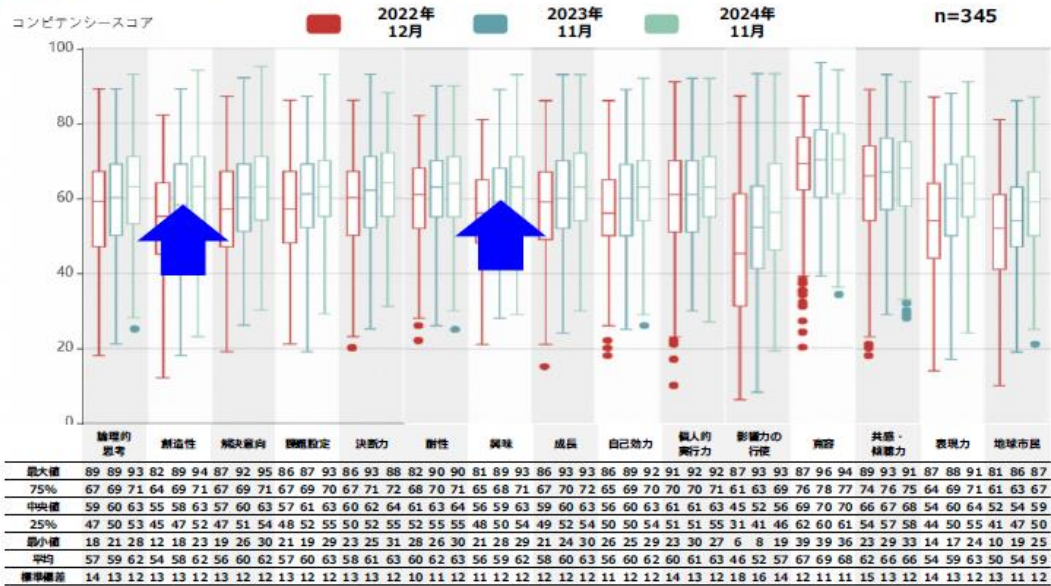


- ・ 1年生から「Ai GROW」を受検し、経年とともに基本的に伸びが見られます。
- ・ 学校コンピテンシーにおいては、
特に「**多様な価値観を尊重し、新たな価値を創造する力**」においては、
上位層で大きな伸びが見られ、中央値も伸びています。
- ・ コンピテンシーを見ると、特に「**創造性**」「**興味**」に関しては、
上位層、中間層、下位層、全体的に大きな伸びが見られます。
- ・ 「**寛容**」「**共感・傾聴力**」の中央値が他と比べて高く、
他者を受け入れたり共感を示すのが1年生と同じく3年生の強みといえます。
- ・ その他のコンピテンシーにおいては、2年生の頃より継続して
「**協働性**」「**リーダーシップ**」において、全体的に伸びが見られます。

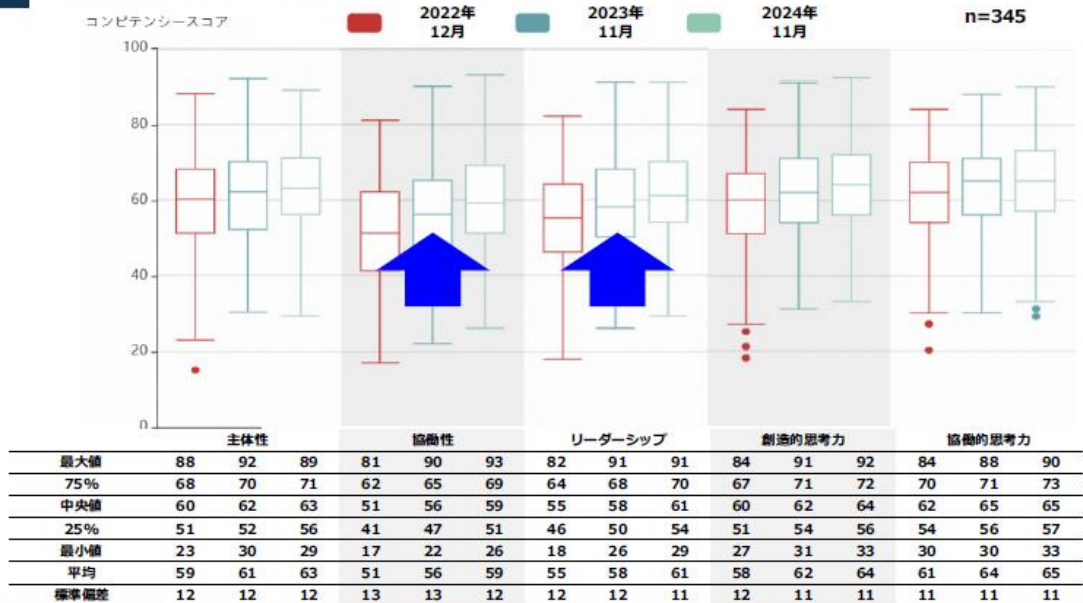
学校コンピテンシー分布：3年生



コンピテンシー分布：3年生



その他のコンピテンシー分布：3年生



② 評価分析

- ・1年生から「Ai GROW」を受検し、経年とともに基本的に伸びが見られる。
- ・学校コンピテンシーにおいては、特に「多様な価値観を尊重し、新たな価値を創造する力」において、上位層で大きな伸びが見られ、中央値も伸びている。
- ・コンピテンシーを見ると、特に「創造性」「興味」に関しては、上位層、中間層、下位層、全体的に大きな伸びが見られる。

- ・「寛容」「共感・傾聴力」の中央値が他と比べて高く、他者を受け入れ共感を示すのが3年生の強みといえる。

- ・その他のコンピテンシーにおいては、2年生の頃より継続して「協働性」「リーダーシップ」において、全体的に伸びが見られる。

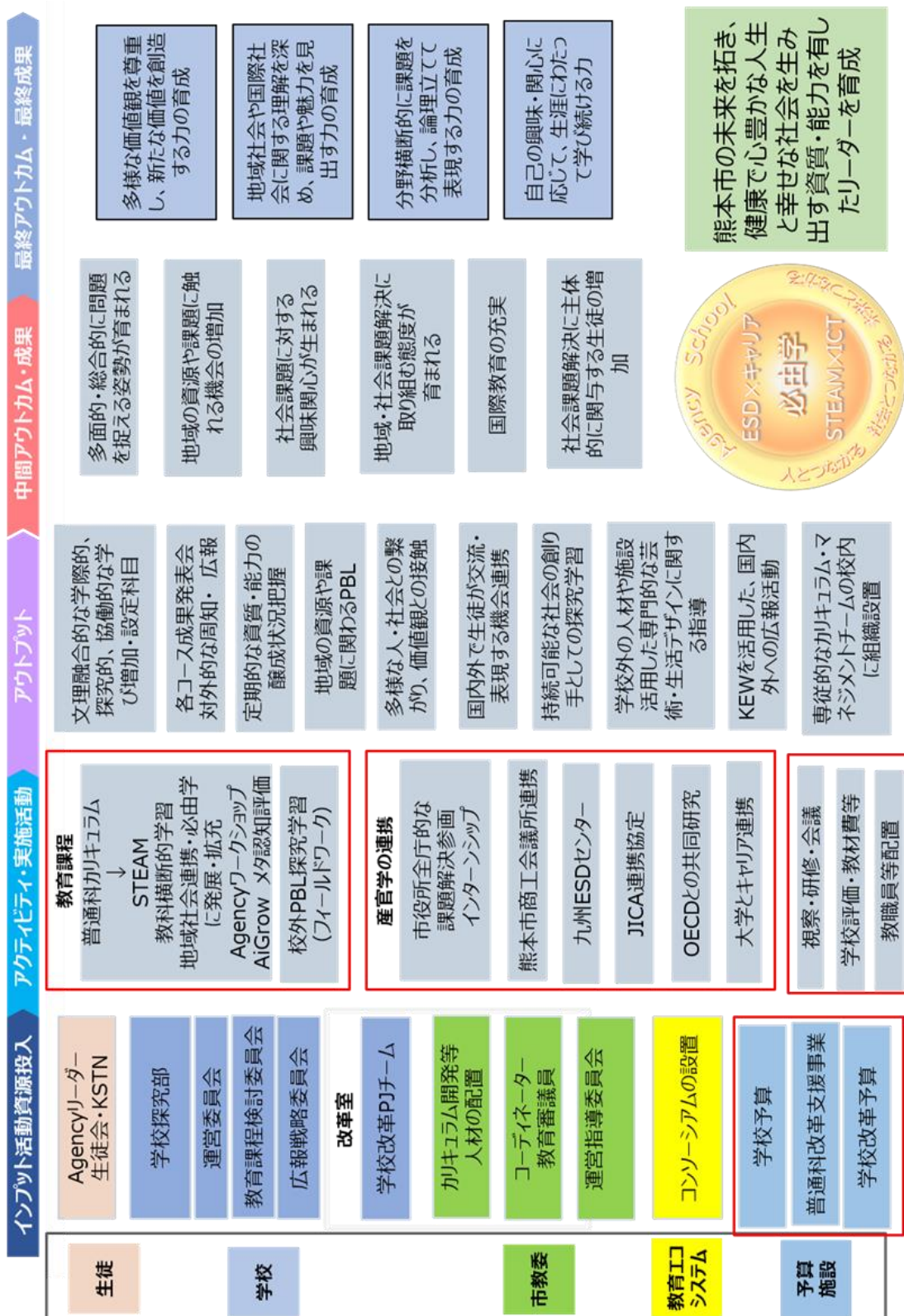
今回の検証において自分たちでプロジェクト学習を企画・実践・発表する機会を総合的な探究の時間を積極的に取り入れ、外部人材との協働や探究活動を通して、生徒たちが多様な考え方に触れ、知的好奇心を持つ機会を設けることが学校コンピテンシーを伸長させることに有用であることが分かった。今後、持続的に学校コンピテンシーの伸長を図るためには、熊本市役所との連携を更に強化し、課題解決型、教科横断的な学習を通して、地域社会の一員としての自覚を促す取組を行っていくことが重要である。

V 事業一覧

項目	内容	対象	日程
運営指導委員会・コンソーシアム会議	第1回運営指導委員会・コンソーシアム会議	運営指導委員 コンソーシアム構成員	8/5
運営指導委員会・コンソーシアム会議	第2回運営指導委員会・コンソーシアム会議	運営指導委員 コンソーシアム構成員	3/21
総合的な探究の時間	感じる探究！in 必由館	生徒	5/21
総合的な探究の時間	総合的な探究の時間の活動中間発表とトークセッション	生徒	10/2
総合的な探究の時間	総合的な学習の時間の活動成果の発表会「探究フェスタ ～学びのシェアタイム～」	生徒	3/21
「必由学」「探究的な学習」	「NHK 最後の講義」へ聴講生として参加	生徒	8/28
「必由学」「探究的な学習」	「世界津波の日」高校生サミットへの参加	生徒	10/23-24
「必由学」「探究的な学習」	フェアトレードをテーマにした他校交流会	生徒	11/11
「必由学」「探究的な学習」	第5回 SB Student Ambassador ブロック大会（九州大会）への参加	生徒	11/12
「必由学」「探究的な学習」	OECD Education 2030「プロジェクト∞無限大（Project∞Infinity）」への参加	生徒・職員	通年
「必由学」「探究的な学習」	インドの高校生とのオンライン交流	生徒	通年
「必由学」「探究的な学習」	スコラ手帳の活用	生徒	通年
「必由学」「探究的な学習」	第2回『熊本市議会 高校生議会』への参加	生徒	1/25
「必由学」「探究的な学習」	地域創生同好会の活動	生徒	通年
外部イベント	TGC 熊本出演&協力	生徒	4/13
授業改善研修	熊本大学大学院教育学部 特任教授 前田 康裕 氏 テーマ：『教科を超えて学び合う授業研究会 ～生徒の視点で授業を改善する～』	教職員	6/19 11/7 2/10

授業改善研修	職員間公開授業の実施	教職員	11/7
授業改善研修	I C T活用能力向上校内職員研修	教職員	6/12
授業改善研修	株式会社 夢をかなえる研究所 代表取締役 白石 裕子 氏 「教育現場に必要な対話とファシリテーション」 ～言いたいこと、言いにくいことを相手に伝えるためには～	教職員	7/5
講演・講義	N P O法人結び手代表理事 福岡洸太郎 氏 「国際理解に必要なこと」	生徒	4/30
講演・講義	Y'sReading 代表取締役 熊本大学医学部 教授 中山 善晴 氏 『「自己表現としてのプレゼンテーション20×20」～ペチャクチャナイトを使ってプレゼンテーション能力を身に付けよう～』	生徒	5/21
講演・講義	アニメーター 松本 葵 氏	生徒	11/16
視察研修	EDIX 東京(教育総合展)視察	職員	5/8-10
視察研修	浜松学芸高等学校視察訪問、生徒会との意見交換	生徒・職員	12/13-14
視察研修	広島県立広島観智学視察訪問	職員	12/17
視察研修	佐賀県立牛津高等学校学校視察訪問、生徒会との意見交換	生徒・職員	12/9
広報	中学生対象学校説明会の開催	中学生	8/1 9/28
広報	芸術コース音楽系成果発表会	生徒	6/15 11/16 2/1
広報	第一回「必由書道展」	中学生	7月
広報	学校説明会の開催	中学生・一般	8/1
広報	芸術コース体験入学	中学生・一般	8～9月
広報	中学校訪問・新学科紹介	中学生	8～10月
広報	芸術コース美術系書道系制作展	生徒	1/21-26
広報	生活デザインコース成果発表会	生徒	1/24

熊本市立必由館高等学校 新学科カリキュラムマネジメントロジック案 R5～R6年度



【熊本市立必由館高等学校】文理総合短探究科（地域社会学科 令和6年度設置）

教育理念：自ら考え、主体的に行動し、多様な人々と協働しながら、自らの人生とよりよい社会を創造する力を育てる学校を目指す

革新的な教育活動の実践

《育成する資質・能力》

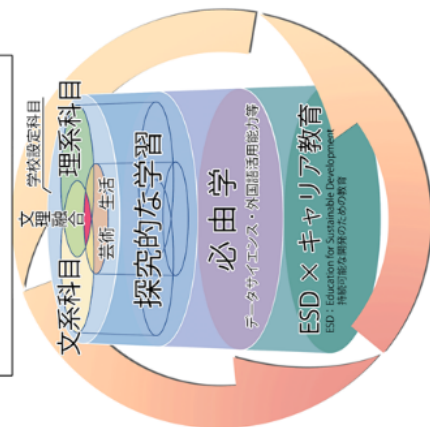
- I 多様な価値観を尊重し、新たな価値を創造する力
- II 社会に関する理解を深め、地域の課題や魅力を見出す力
- III 分野横断的に課題を分析し、論理立てて表現する力
- IV 自己の興味・関心に応じて、生涯にわたって学び続ける力

《特色・魅力ある先進的な教育の取組》

- ① 少人数によるクラス編制、生徒が主体的・協働的に学ぶ仕組み
多様な生徒へのきめ細かな指導、支援を実現 1 クラス30人または35人の少人数によるクラスを編制(令和6年度入学生から)。
- ② 「学校設定科目 必由学」の新設
生徒が主体的・協働的に学ぶことのできる授業づくり
- ③ 熊本市役所等、地域社会の資源を活用した課題解決型学習の充実
市役所の全面的な協力体制のもと、市立ならではの教科等横断的・探究的学習
- ④ 探究活動等で収集したデータを科学的に分析・検証し活用する力の育成
ICTを活用することにより、課題解決に向けデータを科学的に分析・検証し、表現する力を育成
- ⑤ 生徒・教師が主体的に学校づくりに参画する Agency School
生徒が授業づくりや校則の策定・見直しなど、生徒が学校創生に参画教育実践及び教育的效果を積極的に国内外に還元するとともに、自らの学びは自らが創る Agency School



すべてを総合的に学習する



目標

- ① 少人数によるクラス編制、生徒が主体的・協働的に学ぶ仕組み
- ② 「学校設定科目 必由学」の新設
- ③ 熊本市役所等、地域社会の資源を活用した課題解決型学習の充実
- ④ 探究活動等で収集したデータを科学的に分析・検証し活用する力の育成
- ⑤ 生徒・教師が主体的に学校づくりに参画する Agency School

成果

- 令和6年度入学生から文理総合探究科 文理コース35名×7クラス 芸術コース30名1クラス 生活デザインコース30名1クラスの少人数クラス編成とした。教職員数は現状を維持しながら、少人数学習を実現することで、多様な生徒へのきめ細かな指導・支援を実現する。少子高齢化時代における新たな学校の在り方として、生徒が主体的・協働的に課題解決に向けて議論や検証、考察ができるような授業づくりを実現するとともに、指導法の工夫・改善の研修を充実させ、教職員の指導力向上を図る。
- ・社会ではばたかための基礎力を身に付ける
コアスキル（12回/年） データサイエンス（8回/年） 多文化理解（7回/年）
 - ・市役所全庁の全面的な協力のもと、地域・社会が抱える課題に対して様々な観点から仮説を立て、専門家や地域の力を借りながら自分の考えを深め、課題解決への糸口を見出す課題探究型の学習を行った。高校生が社会の一員として地域（熊本市）のよさや課題等を自分事として捉え、自己のキャリア形成と関連付けながらよりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することができるよう今後も取組内容のブラッシュアップを図る。
令和6年5月23日「感じる探究 in 必由館」 令和7年3月21日「探究フェスタ ～学びのシェアタイム～」の実施
- 学校教育目標「出よう つながる ～必由館でやりたいカタチに～」を策定
職員へは外部講師による授業改善校内研修研修により本校教職員全体の主体的・対話的な深い学びの一層の充実を図ることができた。生徒へは各種イベントへの参加を通して、異なる地域、高校に通う生徒とともに社会課題について考え、議論を重ねることでのAgencyを高めることできた。